

であるが、其の結果を豫測すると、殖る者は同志會で、先づ百四五十名と云ふ處であらう、政友會は五十名減るとしても、やはり百五六十名と云ふ處であらう、國民黨は怎樣なるかと云ふと二十五名以下に下ると云ふ事は保險付ちやと云ふて居る、中正會は尾崎を残した外は全滅で、新無所屬が四五十名は出來よう、兎も角國民黨が政治上存在の價値を失ふて來たと云ふ事だけは何人も異存はない。(大正三年九月)

第八章 千變萬化の内外の政局

好運なる大隈伯

軍國議會も無難に濟んで、出征の陸海軍が萬死を履んで國民後援の下に努力奮闘し初むると、彼是と非難を受けた加藤男の外交が愈國民的外交の實効を擧げ、國民的要求が着々貫徹さるゝと云ふ愉快な結果を來したので、大隈内閣に對する好評は豫想外に出てをる、勿論政局の走馬燈は千變萬化應接に違あらざる習の世の中なれば、明日の事は何んとも言へぬ、何んとも言へぬが然しながら、彼の松隈内閣時代、憲政黨内閣時代から見ると、如今大隈伯に對する内外國民の信任は非常に深厚なるもので、好運なる伯の

前途は益々樂觀せらるゝ有様、先づ以つて伯の萬歳を三唱しなければならぬ。

元老と大隈伯との會合

好事魔多く、好運嫉まるゝ世の中、順風に滿帆を孕んだ流石の大隈内閣にも、周圍に山縣、松方、井上、大山なんどの往かず後家の多いだけに、時々痛くない腹を搜らるゝ目に遇ふことがない譯でない、其れに政友會の原敬や、大山師の後藤男等が、何ぞ事あれがしの此等の後家婆たちに、茶々を入れたり、種々の風評を吹きこんだりするが上に、搗て、加へて加藤外相の無愛想と、尾崎法相の元老日參とが、種々苦情の種を播いて居るので、政機の圓滑なる運轉を沮害し、千載一遇の大局に影響を來すが如きこと

があつては甚だ容易ならずとあつて、大隈伯も時々元老懇親會なるものを開かれるさうぢやげないやはや元老閣下等は、始末に困た者で御座るて。

反對黨の脅押と元老の底意

大隈伯は最近或る公會の席上で喝破して曰はく「政權授受は議會で出来る、公明正大に天下公衆の前で出来る、今更暗中飛躍だの運動だのと、其んな野暮な手を使ふ必要が何處に在ると、以て反對黨の手が早くも元老の脅に廻つて居ることを知るべしぢや、元老懇親會席上の伯は、出て來る問題を片つばしから例の得意の法螺で吹飛ばすさうであるが、猶ほ懲りすまに、松方後入齋は茶々を入れ、山縣公、井上侯は頻りに無理な註文をするげな、此等ヨボくの爺様連が今更廟堂へ若返でもなかるうが、然し閥族

打破の政友會が、其の手を執つて起して見たり、元老征伐急先鋒の尾崎法相が、山縣公や井上侯へ日参やら御百度踏に骨折ることは、これもやッぱり變れば變る世の中さね。

後藤男の日支銀行

大隈伯の前途が樂觀せられるだけ、其れだけ伯の内閣の壽命が長く續くと見て取つて、在野の有志輩や、官吏の古手などが、種々様な献策をす、註文を持懸けるので、早稻田の私邸も、總理大臣の官邸も、門前市を成す有様で、玄關番先生が獨り應接送迎に疲れて居る、其の中に素敵滅法界な名案を提出したものが一人ある、并は誰あらう不遇と失望とに目下煩悶最中なる後藤男で御座る、男は資本金一億萬圓の日支銀行を設立して、

自分が總裁の任に當つて、一大飛躍を試みたいと云ふ大計畫の意見書を、早稻田伯に奉呈せられて、秋冷時節に百度以上の熱焔を、眞向から吹きかけたげな、所が相手が七十七歳の冷切つた老伯だけに感じがない、其れも方法さへ付けば至極善い事ぢやと云ふ寒たい一言で御免蒙られたと云ふ噂ぢや、其の後後藤男の足跡が早稻田邸前に消滅した處を見ると意外に脆く斷念したものか知らんて。

新聞雜誌檢閲と加藤外相

元老の會合と後藤男の献策の幕が濟むと、政府では突然外交に關する機密漏泄を防ぐ爲、友邦の好感を維持する爲とあつて、外務省令として新聞檢閲規則と云ふものを出した、中々面倒臭いもので、筒様な檢閲を受けて

ゐては、新聞雑誌の發行も出來ないと云ふ位、何故箇様な物が突發したか
と聞く、これも亦餘儀ない譯で、獨探の手に成つた日支密約と云ふもの
を、發表した通信者があると共に、日本で一番紙數の多い某新聞が其の條
約の全文を掲げたから起つて來た事ぢやさうな、時恰も支那の官民が日本
の政策に疑惑を懷いて居る、其れを獨米の策士等が煽動して、排日思想を
鼓吹せんとして居た矢先であつたので、彼等は奇貨措くべしと、自家製造
の日支密約を、本物らしく振廻はして、支那人を震ひ上がらせて、北京に
於ける日本の外交を極力妨害したとやら云ふ話ぢや。

無責任極まる新聞紙

例の偽造日支密約を記載した龍大の新聞とは、何物かと云ふと、大阪朝

日新聞である、ツマリ大阪朝日新聞の爲に、天下の新聞雑誌が連累を喰
つた譯さ、一體國家の大事に際して、國際の親善關係を維持すべきは、單
に一國の政府に限らぬ、苟も社會の木鐸を以て任ずる新聞雑誌も、皆其の
責任を帯ぶべき筈だ、然るに今日天下の大新聞社たる大阪朝日を初めとし
て、新奇の記事を掲載すれば盲目千人の目を喜ばす、随つて購讀者が殖る
と云ふ、營業本位に編輯する、現代新聞雑誌の遣口が、奇怪千萬の話ぢや、
其處で新聞記者と加藤外相と、双方大隈伯の許に出かけて、擦つた揉んだ
の其の揚句、譯不分に濟んで了ふたと云ふ話、新聞も大に注意するが宜
し、加藤男も大に雅量を發揮するが宜し、内輪の喧嘩勝敗なし、何でも中
能くして貰ひたい。

膠州灣包圍と陸海軍の活動

膠州灣包圍の爲に出征した陸軍の司令官は神尾中將で、海軍は加藤中將であつて、孰れも意外の奮闘振は吾々國民の感嘆措かざる所であるが、今一步作戦を進めて、思ひ切つた行動に出て貰ひたいものぢや、然うせんと内地に控へた山東省目指して侵入せんとしてをる商賣人が、手持無沙汰で困つて居るさうぢや、神尾さんと加藤さんに確かり頼む。

山東鐵道の占領と支那根性

戦局は益進んで我が上陸軍は愈交戦地帯の鐵道を占領し、猶ほ交戦地帯外の線路をも占領保管する事になつた、一體山東鐵道は膠州灣租借の條約に附屬したもので、吾が軍にて之を占領保管するは當然だであつて、公然占

領する事になつた譯ぢや、开様すると支那の没分曉漢連が總立となつて、南京事件で謝罪した張勳が怒つたとか、日本で食客をして居た梁啓超が悲憤慷慨の演説をしたとか、獨逸公使が袁世凱に抗議を申し込んだとか、國家の安危此一舉に在りと云ふ騒擾であつたが、結局加藤男の外交が萬難を排して、既定計畫を完全に遂行し得た結果、國家國民齊しく加藤男の勞を多として居る。

一體支那人は問題の起る毎に御神酒頂戴したい連中が多いので、馬賊あがりの張勳や、食客あがりの梁啓超などの代物が、何かに附けて騒ぐタンビに、袁から冥加金が貰へるとあつて、例の支那人根生を發揮したと云ふことぢやげな、兎角厄介な油蟲どもさ。

省と極つた、然るに其れだけ削減する所には、又其れだけの御褒美とあつて、二箇師團の増設と、海軍擴張計畫を許諾したげな、二箇師團は來年度から六箇年計畫で、來年度には約七十萬圓を計上し、海軍擴張は一億三千萬圓の擴張費を認めて、戰艦三隻の繼續費を要求するの外、來年度に於いて驅逐艦六艘、潜水艇二艘の年度割、七百萬圓を計上することに決したさうな。

戰艦一噸九百圓に値下げと山權の醜體

八代海相の海軍擴張の豫算に依ると、權兵衛が一噸一千圓の見積にて組立て、居た甲鐵艦の豫算を、一噸九百圓に組替へると云ふ評判ぢやが、果して然る豫算が議會に出たらば、山權海賊の正體は、八代海相に依つて立

派に裏書せらるゝことになる、一噸百圓と云ふ口密錢の相場ぢや、權兵衛は是れでも國家の師表だの、武士道の生粹などゝ、今だに抜かし居るか知らんて。

政務官制度の新設

加藤男は在野黨の總理で居る時分に、政友會の改正文官任用令を評して、次官入黨令だと罵倒したが、今度は自分が英國流の理想を實現すべき機會が來たとあつて、就任以來五六箇月を費して、ヤツこの事に各省政務官として正副參政官を新設する事になつた、誠に結構な事で御座るが、是れは貴衆兩院の議員に限ると云ふ規定がないから、愈來年度の豫算が通過すると、如何なる人が任用さるゝかが觀物である、處が國民黨、中正會乃至同志

會も同様、獵官熱が三十九度以上であると云ふから、猛烈な運動が各方面に行はるゝ事であらう、又其の任用された人物次第で、大隈伯や加藤男の手腕心術が試験せらるゝ譯になるのぢや、然し三十九度以上の獵官熱に胃されて居る患者ごもが、來年の四月迄、半年以上、氷嚢を頭に戴いて待て居るとは、さてさて是からの秋の夜長や春の日長が、嘸御退屈の事で御座らう。

北里博士と一木文相

傳染病研究所が、内務省から文部省へ管轄替となつたと云ふ、是れは長谷場、奥田兩大臣時代にも随分起つた問題で、本と云へば設立當時から彼是と議論のあつたもので御座るが、優柔不斷の一木文相が、珍らしく決行

した所を見ると、黒幕に何人か辣腕の役者が隠れて居るに相違ない、誰であらう、寧ろ今日天機を漏さん方が花ぢや、併し青山博士と北里博士の暗闘でないことだけは保證して置く。

北里博士の新聞政略と無政府主義

昨今の新聞を見ると、北里博士の最負は素破らしいものであるが、今から見れば一昔、乃公が大學教授になり損うたのを無念に、取敢へず福澤翁を抱込み、後に内務省を取こんで傳染病研究所に閉籠つて、大學派の向を張つたのが北里博士で、乃で非大學派の醫者連を掻集めて、一方の旗頭となつて、醫師社會に勢力を延して居るのが北里博士ぢや、此の北里の學問上の敵手は、青山博士でなく、同じ熊本出身の緒方博士で御座る、二人の

間に口恥しい暗闘が伏在して居る、併し我等は北里博士に一片の忠告をし、
て置く、いにか最負ある博士でも、内務省の官吏である、官吏には官紀が
あつて、上級の命に服従する性質のもので、上官に反抗することは許され
てない、況んや下僚や看護婦や、門番迄をも煽動して、傳染病研究所の同
盟罷工を行はしむるに至つては、官吏の本分を脱線して、破壊主義者、無
政府黨員たることを實現して居る、學者の事としては極めて陋劣な仕方
である、寧ろ潔く單獨に辭せば辭すべし、然もなければ大隈伯は官紀振肅の
上から、博士を懲罰する必要がある。

不行跡な北里先生

新聞に好評の北里先生も、眞面目な學者社會から見ると、決して結構な

代物でない、其の昔、人の好い福澤先生を取こんで、私立傳染病研究所を建
てるに就いて、一萬金の出資をせしめた所は可かつたが、當時新聞に歌は
れた藝者を、一萬圓で請出したので、福澤先生は吃驚仰天、乃公は彼奴を
買かぶつて居た哩と嘆息された、其れ以來何等私行の改善を見ない、自己
經營の養生園と、内務省の傳染病研究所とを混同して、善財には大に成功
したものであるが、品性の修養と來たら、藥に仕たくも爪の垢ばかりもな
い、其れで學者で鳴つてゐるなんて、臭い者身知らずだと云ふ定評ちや、嘗
て狐を神さんと擔いだ新聞末社の北里稱讚は、一向本統に受け取れぬ哩。

福島都督と佐久間總督

日獨戰爭以來、軍人でなければ。夜が明けぬと云ふ好時節に、武運の盡

とも謂ふべき歟、福島都督は大將には昇進したが非役となつた、佐久間總督はまだ在官ではあるが、近日退職と云ふ評判で、既う脈は上つた物だ、福島將軍の退任の理由を聞くと、軍人社會ではアレは定評のある人ぢやに巧く彼迄出世したのうと云ふてをる、其れから佐久間總督の方は既う可からう、大分金も貯つて居るからと云ふ定評ぢやげな、然うして見ると、福島大將は無能の標本で佐久間總督は武臣錢を愛すと云ふ奴で、孰れも軍人界の爪弾きとは情ない。

大隈内閣と總督政治

福島無能、佐久間蓄財に孰れも秋風が立つとすると、此の次は怎樣してもピリケン將軍寺内伯の順番だ、伯の政治は遂に徹底しないと云ふことに

了つてをる、非立憲政治に飽き果てた、寺内さんに早く元帥になつて榮轉して貰ひたいとは、朝鮮在留の日本人の祈禱である、勿論寺内伯自身は清廉潔癖兼有能でもあらうが、其の信任せる部下雜輩が無能で墮落し切つて居るので、總督政治、即無能政治と云ふ下馬評は何處も同じ秋の夕暮、武官制度の總督政治、都督政治はもはや時代後れの政治である、大隈内閣もコ、一つ思ひ切て、平素の主張を挈げて、文武官兩立の新制度を建て、適材を適所に配布して貰いたいものぢや。

大石内相説と片岡總督説

近頃評判の高いのは、大石入道の内相説で、之に對して暗中飛躍を試みてをるのは、例の大浦内相ぢやげな、大浦尾崎が孰れも内相落第者である

ことは、前に書いて置いた通りだが、爾來尾崎は觀念し、大石入道を説いて其の志を動したと云ふ事實がある、唯早稻田伯の意見が、今一段とハツキリしない所があるのと、大石裁松が例の謙讓の美德を發揮して、我輩は閣外にて盡力したいと云ふて居る處を綜合すると、内相の專任沙汰はまだまだ前途遼遠ぢや。

さて又佐久間總督の退任が、前記の通になると跡は片岡海軍大將と云ふ噂がバツと立つた、何の事はない、仔細を叩くと、同志會の自稱大臣候補者の一人片岡直温が、汽車中の冗談半分臺灣總督なら一番乃公が遣つて見ツちやいのうと云ふたのが噂の種、長いこと陸軍側の獨占到歸して居た總督の御鉢が、今度は目出たく海軍に廻つて片岡大將が、總督になると云ひ觸

らしたもので、全く片岡違であつた。

後藤男の暗中飛躍

時局に伴ふ大隈伯の喇叭が静まつて、政海の表面は一波も動かぬ無事太平を示して居るが、土底に暗流が逸つて居る、不平鬱勃、一時も安座してこれぬ政治山師の後藤男は、大石入道に面會を求め、原敬に面會を求め、京城へ向けて密使を派する、而して又例の岡邦や伊東己代治等と會見する、一人で十人分動いて御座る、其の心中を割つて見れば恁様であらう、「此の次の内閣には、西園寺侯や山本伯には既う御鉢は廻らん、やはり政友會が土臺となつて、其れに何處からか頭臚だけを借入れて來なければならん、其れには京城に凭様した總理大臣志願者の寺内正毅大臣が居る、此處一番

此の男を擔いで、次の内閣に一番乗ぢや」と云ふのが、此の和製ルーズベ
ルトの手品ぢや、甘く往つたら御慰み、拍手喝采をタンと御願。

逆境に沈淪したる官僚

後藤蠻爵、中小路廉のやうな官僚連は、政界の現状より見れば、恰も木
から落ちた猿同様ぢや、上役に媚を呈して、鰻登りに登つて來た迄の事で、
修養がなく忍耐がないから、逆境に居つて身を處する道を知らない、唯百
足搔に足搔いて以て、仆れて已む迄の事、笑止なものぢや。(大正三年十月)

第九章 議會開會前の政界

今期議會の政戦

憲法上の通常議會に實質上の軍國議會を兼ねたる第三十五回帝國議會は愈
々本月五日を以て召集され、爰暫くの間復た昆谷原頭に政界の白兵戦を見
んとす、殺到し來るものは其れ風か雨か、政友會が大隈伯の舊乾兒なる國
民黨と轡を駢べて現内閣に肉薄せんとする形勢は、譬へて言つば徳川軍の
多勢が豊臣家譜代の諸大名を味方として大阪城に攻め寄するに似たり。然
れども原敬は勿論家康の器にあらず元田、大岡、高橋の輩は本多、酒井、
藤堂の勇を有せず、客將たる犬養、關の徒亦淺野、池田の材に比すべくも

非ず、而も一方政府の與黨は大坂軍の如き掃き集めの野武士連中にあらざるなり、即ち形勢は政國聯合軍こそ關東勢に似たれ、内容は却つて在野黨の大坂軍に似たるを見る、若し難攻不落の大坂城は落ちたりと雖も少數黨の現内閣は遂に陥落せざるべきか、興味を以て觀るべきは今期議會の政戰なり。

新聞紙と輿論

政國二黨の機關若くは準機關たる新聞雜誌は勿論、或種の利益を目的とせる操觚者が、詭辯僻説と譏構捏造を事として現内閣を毀さんとするに對し、大隈伯系統及び同志會側の機關紙若くは準機關紙が負けず劣らず應戰力闘コ、を先途と互にインキの雨を降らしつゝある有様は例に依つて例の

如く、其の濫用する一號活字も殆ど月並調なり、此の間に立ちて輿論を支配し輿論を代表せる中立新聞は、自重して容易に鋒鉞を顯はさざるの觀あるも概して大隈内閣に同情し伯をして思ふ存分に其抱負を實行せしめんとするの意嚮は各紙の上に看取せらる、現に政界隨一番の策士を以て目せらるゝ彼の梟目先生が、阪府の二大新聞を動かさんとして大に運動する所ありたりとの説は、一時消息通の間に於て頻りに噂ありたるも、爾後の紙上に其の効果の現はれざるを見れば、策士の策が失敗に畢りたるものと視て可なるべし、蓋し輿論は新聞に依りて動き、新聞は輿論に依りて立つ、此の操觚界の現象は國民意嚮の反映として承認せざる可らず、近來大隈伯後援會の各地に起りて其の聲烟の益々揚る所以のものも亦偶然に非ざる也。

に對しては上院各派の間に兎角の非難を放つ者あるが如しと雖も、時局を圓滿に進行せしむる上に於て現代の政治家中、伯以外、他に其人なきを認めたるに因るならんか、随つて政友會に屬する少數の頭顱を除くの外は、大體政府に賛成するものと視て大過なからん、同志會に至つては素と是れ現内閣生存の營養機關なり、攻守共に政府と行動を俱にするは燕の群を爲して南飛し雁の列を成して北征するに均しからん、唯だ二三油蟲の類が自ら策士を銜ふて始終黨中を攪拌せんと企つる者あるも、同志會に之れあるは空氣に酸素窒素のあるが如く、此輩も亦時に必要とせざるに非ず、イザ鎌倉とならば忽ちに鳴を鎮むるや必せり。

二個師團増設問題

宿年の懸案たる此の問題は行詰りのドン尻として今や是が非でも解決せざる可らざるところの端目に臨めり、而して政友會は此際大隈内閣をして此の政界の岩礁を去除けしむるは自黨が内閣を乗取りたる際に好都合なりと爲し、國民黨は延期論を唱へ居りたるに、政界の情勢は最近に至りて急轉直下し、國民黨は絶對的反對を仄かし政友會は無意義なる一年延期論を振り翳して政府に薄らんとするに至れり、勿論幹部は今以て軍配を揮らざるが故に物窮つて通ずるやも知れずと雖も慘憺たる低氣壓は此問題を目蒐けて密集しつゝあり、然り事と場合に依りては内閣の顛覆と爲るか將た議會の解散と爲るか、孰れにしても憲政史上に一個の新墳家を増すものは此問題なるが如し、而も今日の狀勢を以て測るに内閣が此問題の爲め阿容々

々政權を反對黨に譲るの理は、萬之れなく、衝突の場合には議會の解散を見るや必せり、明年の即位式大典に參列賜はるを、千載一遇の光榮とせる現任議員が、果して議會の解散を賭してまで此問題に反對するの勇氣ありや否やは大なる疑問なり、況んや原總裁は既に山縣老公に對して増師養成を仄めかしたりと云ふの説あるに於てをや、結局、政友會は自黨の窒息を免るゝ爲め論戰に於て一と刻ね刻返るべしと雖も、最後は幹部の慰撫に依り盲従で鼻を付くるものと視て差支なかるべきか。

外交問題と後藤男

外交問題も政界攪拌の一利器に利用され捏造製造所の多き當に四五に止らざるなり、就中、政争界に向つて頻りに半疊を投げ込むものは悪戯者の後

藤男にして、彼の對支同志會の如きも近頃之を操るものは後藤男なりこの説あり、最近内田良平の配布したる對支問題解決意見の如き蓋し亦た男の手品箱より出でたるものならんか、否か、野心家の勸進帳、果して幾千の奉納燈を贏ち得べき、請ふ鼻眼鏡越に之を見よ。

領土擴張主義の本領

日本の對支政策を飽まで高壓的に出でしめ、曾て朝鮮に施したる政策を支那に適用せんことを主唱する者あり、其論陳腐なりと雖も、此種の帝國主義を鼓吹するには今日は實に其の時機を得たるものなり、然り軍國時代に際して亢奮せる國民は、歐洲大亂の戰報を聞くに従つて一層殺伐の氣象を帯べり、此機に乗じて侵略主義を唱ふ、蓋し策士の策士たる所以なり、

然れども此種の論策を立つる者は、時世後れの浪人組にして、之を使嗾する者は軍閥主義の政治家、若くは自ら爲にせんことを欲する野心家に外ならざるは、逝ける明治時代も大正時代の今日も渝ること無し、其策する所快は則ち快なりと雖も國家を危険に導くものは必ず此種の論者たらざる可らず、獨逸が今現に血を以て贖ひつゝある慘絶悲絶の大叫喚は此種の論者に對する好個の實物教訓に非ずや、血を以て獲たるものは血を以て贖はざる可らず、寧ろ恩を售り仁を布きて平和の發展を策するに如かざるなり、而して此結果の齎らす領土擴張は、血を以てする代價よりも廉價にして且つ永く平和に其の領土を保つ所以なり。彼の軍閥主義の政治家たるもの宜しく一考して可なり。

加藤男の外交

帝國の外交家としては世を擧げて小村加藤を歌ふたるものなり、然るに小村侯已に棺を蓋ふて今は加藤男を剩すのみ、之に對抗する外交家の出現せざるは帝國の爲め大に寂寞を感せざるを得ず、而も南瓜は糸瓜の長きを嘲り、糸瓜は南瓜の圓きを嗤ふ、加藤男たるもの豈復た多少の批評を免れんや、然れども男の外交を攻撃する者は政友會、國民黨、薩派の連中にして敵は本能寺に在り、其の非難攻撃素より評價の價値を有せざるなり、國民に至ては一般に男を信任し、目下の時局に男の外務省に在るを多とせり、男たるもの左顧右眄を要せず、信する所、爲さんと欲する所を最も大膽に最も果決に斷行して可なり。

青島と南洋

皇國の神兵一たび戈を執れば、敵としあるもの總て蹄下の落花、鞭下の蝴蝶の如し、獨逸が經營十有七載、極東唯一の根據地、策源地として築き上げたる青島も、今は既に我が國旗の下に軍政を布くに至れり、軍政は歐洲戰亂の繼續中止むを得ざる過渡の非常行政にして、同方面が聽て何等かの形式に依りて帝國の手に歸するは期して俟つべし、唯だ膠濟鐵道は獨逸資本家の事業たるの故を以て之が返還を請求し來りたる哉の説あるも、加藤外相は知ぬ顔の半兵衛に蠅がたかりたる程の反響をも與へざるが如し、結局、腕に依りて奪ふたる物は一切遠慮なく頂戴の事となるは是亦論を俟たざるべし、次に帝國艦隊の占領したる南洋のマリアナ、マーシャル、カロ

リナ諸群島の處分に関しては英國側の立場、並に其の冀望を諒察せざる可からざる事情もあるが如しと雖も、是等諸島は日本に取りて南洋發展の土臺石と爲るべきもの、斷じて我が殼中より逸すべからざるなり、切に加藤男の健在を望まざるを得ず。

米國と比律賓

日本の勢力が南洋に發展することを好まざるは米國を以て最とす。是れ米國が其の自國領なる比律賓の維持に直接危険を感じる自然の數なり、是に於て乎、日本が愈々南洋に指を染むる曉には、米國は獨逸の請を容れて日本に對し抗議を提起すべしと揣摩する者あり、蓋し米獨二國は極東問題に關し久しく相默契して支那の舞臺に活動し來りたるもの、此の因縁より

推すも風説の遂に事實に化せんも知るべからずと雖も、交戦權作用に基く領土獲得に對し米國が抗議を提起するには正當の理由の發見に苦むべし、更に一步を進めて言へば西半球の大陸國が日本の如き強國を踏み越えて南洋に領地を保たんとするは、最初より非常の冒險事業たり、然り之を喻へば山嶽を跨いて隻脚を陸に置き隻脚を舟に置くが如し、若し米國にして飽まで日本の對南洋發展を妨げんとするに於ては、却つて自ら比律賓の危險を挑發するに均し、米國たるもの豈に毛を吹いて疵を求むるものならんや、畢竟するに形式のみの抗議を試みて結局泣寢入に了るならんか。

航路補助の政國二黨

今期議會の議場を賑はすものは、増師問題、外交問題の二を除けば則ち

此の問題なるべし、然れども國民黨としては先天的に反對の出來ぬ問題なり、政友會亦た前期議會の際に元田總務と郵船重役との間に暗黙的契約成立し、此の結果、陣笠隊長の武と金が試みたる議會演説も實際は郵船會社に於て調製したる脚本を朗讀したるに過ぎざりしは當時に於て既に公然の祕密と噂されたり、此問題に對する反對黨の立脚點すでに斯の如し、多少の波瀾は狂言的に演ぜらるべしと雖も歸納點は逆睹に難からざるなり、三略に曰く香餌の下に死魚あり、重賞の下に勇士ありと、孰れか忠勤演説の勇士たるものぞ、孰れか醜名の死魚と爲るものぞ、國民は近く之を議會の實際に見るを得べし。

内相問題と一木文相

現内閣が萬一の場合には議會を解散し内閣の信任を總選舉に訴へんとするの決心を有せるは既定の事實なり、隨つて此際專任内相を選定するは之が準備として當然執らざる可らざる手段なり、而も其後任に擬せられたる大石は就任を肯んせす問題は又復淺黄幕の中に掩はれたり、蓋し内閣組織の當初、内相の膳は一旦大浦子に据ゑられたるも、尾崎其他諸方面の抗議に依りて大隈首相の兼任に決したるものなり、故に今度は大浦子を内相に振替へざれば子に對して多少義理の立たざる情實あるのみならず、大石は員に備はりて大浦子の制肘を受くるを屑しとせず、彼是の事情にて今回の行惱みを生せるが如し、是に於てか同志會内部に於ては近頃一の名案を提出したりと傳ふ、其案は大浦子を内相に直し、黨の元勳河野を農相に嵌込

まんとするに在りて、爰迄は平凡の立案なるが之に關聯して思ひ付きたる策こそ面白けれ、曰く既に河野を大臣に拔擢する以上は島田をして現在の不平の位置に落伍せしむるを得ず、幸ひに一木文相が意外の失錯の爲め多方面より放つ矢面に立てるを犠牲とし、島田を其の後釜に据ゑんとする獻立なり、註に曰く大石、箕浦は禪學に趣味を有する丈に功利の念なかるべしとの理由の下に姑らく我慢を乞ふ筈なりと、亦以て政界哲理の一端を説明するものに非すとせずや、唯其れ斯の如くにして官僚的の異分子を淘汰し、同志會をして名實共に所謂「我黨内閣に接近せしむるを得ば、勿怪の儲け物と云ふを得べし。

臺灣總督と陸海軍の競争

加藤外相が總督文官制度の主張者なることは頗る多とするに足る、而して渠は内閣の大立物、其の言ふ所自から事實と爲るの時機あるは之を期待して可なるべきか、然れども渠は急げば廻はれの秘訣を解せり、先づ新領地に於ける陸軍側の勢力を一掃する手段として、佐久間總督を罷め、之が後任者を海軍の有力者より物色せんとするの計畫を有するが如し、此の機微の漏るゝと共に海陸軍の暗闘は起れり、即ち海軍に在ては出羽大將頗る色氣あるもの、如く、之に對し陸軍側に在りては山縣老公の指金を受けて安東中將自ら薦めんとするもの、如し、其他片岡大將、藤井中將等亦た暗中飛躍を試みつゝある模様なるを以て、時日の経過するに従ひ其の朦朧戦は漸次色影を濃くするに至るべし、而も大隈伯は陸軍側に左袒するの傾あり

りと言へば、結句、陸軍側の勝利と爲りて安東中將若くは其れ以上の古參者中より撰拔する事に決すべしと揣摩するもの有り、果して然らば加藤外相の描かんと欲する所も遂に『へのへのもへの式』に終らんか、記して之を後日に徴せん。(大正三年十一月)

附記、安藤中將は大將に昇進して臺灣總督になつた、大將は寺内總督の乾兒であるが、殖民地の二總督と一都督が陸軍閥の手に在つて、何等時代の要求に應じた改革の出来ぬのは、國民と俱に深く遺憾としければならぬ。

第十章 議會解散と政局の前途

豫想されたる解散

網堂大隈伯が大命を拜して内閣を組織したのは昨年四月であつた、英國流に言へば其際直ちに衆議院を解散して新内閣の信任を國民に問ふべき筈であつたが、過渡時代に挾まつて居る現下の政局は、今尙ほ此の果斷を敢てせしむるを許さない状態に在る、然れども有繋は大隈綱堂である、之を僥倖して一時を糊塗し、流れ木に蠟燭を灯すやうな運命は貪らない、解散は伯就任以來の理想で胸中に蟠まつて居たのは唯だ時機の問題であつた、則ち一は信任を國民に問ふて以て立憲的内閣の模範を作り、一は新なる總

選挙に依りて政弊一洗の目的を達せんと欲するのが、解散に對する伯の理想であるので有る、政府既に此の大決心を有するの際に於て議會は開かれ、政國二黨は所謂狐の尾を濡らすが如く遲悞しながらも、遂に政府にブツ突つた、勢ひ鹽酸と硝酸の衝突したるが如く爆發せざるを得ない、斯の如くにして虎鬚を引ききたるものは自ら手負と爲り、第三十五議會は棺中に納められた、畢竟豫期の結果のみ、次の問題は解散か果して又能く綱堂伯豫期の結果を齎らすや否やの點である、國民の政治的批判力が幾何の程度まで進歩し來りし乎の問題も、此期を俟つて判然するのである。

現政府の政策

綱堂大隈伯に依りて統一されたる現政府の政策は、一幹の梢に咲き競へ

いめたる上に、内國の財界不況は既定計畫の維持を許さないものである、乃で國庫の基礎を鞏固にする必要上、該案は一般國民より時務に適當なる至緊至要の提案と認められたるに拘はらず、政友會は黨略上よりして逸早く解散前に否決し去つて了つた、畢竟政友會は政府の政策破壊を以て唯一の攻道具として居るのである、故に彼等は政治的血管に於ける動脈瘤とも稱し得べく、此の瘤患を切開し剔抉し去るに非ざる限りは、立法機關の善良作用は到底期し得られない、換言すれば政府と其の與黨のみが善くても反對黨が悪ければ、真正に善良なる立憲政治は望まれない、現内閣が政友會の改善を刺戟すると同時に、政府の一了簡を以て行ひ得らるゝ行政上に於て極力財政の整理を圖つて居るのは此點に於て大に吾輩の多とする所であ

る、彼の山本權兵衛一派が海軍を支配して居た時代には戦艦の製造費一噸を一千圓と見積つたのであるが、現内閣に迫りて之を九百圓に減低した、即ち三萬噸の戦艦一隻を造るには約三千萬圓を支拂つて來たのであるが、今後は同じ物が約二千七百萬圓で仕上る譯である、此の一大英斷は從來戦艦一隻を造る毎に權兵衛一味の高等泥棒が約三百万圓宛、衣囊へ揜ち込んで來たのを、向後は國庫へ收得する事と成つたのである、立法院の改善は總選舉後の結果を俟たねばならぬが、行政府の改善は現内閣の成立後、既に其緒に就て居ると見て可からう。

日獨戦争と政友會

豫期せざりし時局問題は日獨戦争である而して之に狼狽したのは政友會

であつた、蓋し豫期せざる所には準備なければなり、由來政友會は政權に營養され之に依りて膨脹した政黨である、隨つて政權爭奪は彼等の死活問題であるのに、時局の爲め舉國一致であつては南無三昧方の一大事である、乃で曾ては舉國一致を吹立てた事もある政友會は、今度は舉國一致に反對する爲め平和論を唱へ、元老連迄を説き廻つた、御都合主義もコ、迄徹底すれば地獄を通り越して極樂へ着くべき筈に思つて居たが、隈關は日英同盟の精神を重んじ戦争に加はつた結果、青島は疾くに陥落し、今日では太平洋の海上權も日英兩國の海軍力で抑へて了つた、恚うなると政友會たるもの劍の峰を泳ぎ乍らも最後の一藝に活路を求めざるを得ざるの境遇と成つた、是に於て乎、不景氣論を擔ぎ出して頻りに民心の翕合に努め

て居るが、生憎今日の不景氣は政友會内閣の餘殃で其由つて來る所は同會の所謂積極政策の崇りである、殊に今日の不景氣は世界的大勢であつて、戦争せざる米國までが意外の不景氣に泣て居る、同じ不景氣に苦しむ位ならば開戦の結果、他國の領土が頂戴出來る丈け難有いと云ふ論理に歸着するので、政友會の不景氣論も結局、藪蛇の模様である。

政友會の旗印

前期議會の政戦は惣じて政友會の失敗に了つたが、其の失敗も頗る茶番式なので、後世には必ず滑稽憲政史と云ふが如き八文字屋本も出來やうと思はれる、土臺が不眞面目の政黨丈に其の政戦の茶番じむのも是非ない次第であるが、第一旗印の不鮮明であつた杯は容赦の成らぬ問題である、最初

原總裁の意見は増師案の如きは宿年行懸りの小問題である、唯だ外交の失政を奈何せんと云つた風の口吻であつた、即ち同總裁は外交問題を攻道具として政府に肉薄する籌略であるとは敵も味方も認めて居たのであるが、偕て議會の開幕となつて愈々政友會の首領自らが堂々と外交に關する質問演説でもする事かを見て居ると、豈料らんや、加藤外相の言艸ぢやないが、田舎の辯護士と田舎の無智の代議士をして十數日に亘る駄々羅質問を爲さしめたに過ぎなかつた、而も其の揚句却つて外交の無失錯を承認的に裏書をしたるが如き結果を示した器量の拙さ、ドコに大政黨の價値が有らう、終りに國民黨の尻馬に騎つて増師問題に反對し、解散の爲め滑稽なる狼狽を演じたるに至つては抱腹絶倒、斯の序ありて斯の跋ありと謂ふべきか、

古人曰く百足の蟲は死して僵れず支ふるもの多ふければなりと、蓋し政友會の今日あるを諷したものでは有るまいか、既に死せる政友會の尙ほ政界に立てるは支ふる所の髑髏が多い爲に過ぎないので有る。

増師問題と國民黨

併し増師問題に關し政友會が國民黨の尻馬に騎つたと云ふのは客觀的觀察である、主觀的觀察に言へば國民黨こそ虎に騎つた狐であつた、然り狡獪なる狐が暴威を矜る虎を利用したものと見ても差支ない、而も大隈内閣の成立を希望し且つ之を援助すと云つた舌の根の未だ乾かざる國民黨が、手を翻すが如く増師問題を擧げて内閣を屠らんとした魂膽が凄じいが、今頃之を訝かるのは餘り野暮過ぎる、呆けて其理由を承ると増師反對は我

到る處に振り廻し、外債募集の計畫に狂奔した策士が飛び出した杯は、罪作りにも少々念が入り過ぎて居る、鐵力製の軍艦で國防の用が足りる時代でも來たら、是非一度はコンナ内閣も見物したいものだ。

男性的の大隈内閣

曰く政友會、曰く薩派、曰く國民黨、孰れも有りとも有ゆる力を揃せて内閣破壊を企て、遂にお門違ひの憲政擁護會の古看板まで擔ぎ出して槓杆つたが、國民の同情は依然として大隈内閣に集中した、昨冬日比谷で催した内閣反對の國民大會に集會したものが驚く勿れタツタ四十名であつたことは、如何に政國二黨及び薩派の不評判なるかを證明して居る、然りタツタ四十名とあつては飛驒の山間の兎狩りの人數にも及ぶまい、蓋し政府反對

の旗印が不鮮明なのと其の破壊計畫に多少陰謀の存在して居るのを看破されたのとは、則ち此結果を來たした原因であらうが、是で國民大會とは開關以來の珍現象であつた、一方大隈伯は明治四十年來の懸案を自己の手に於て解決し、且國民的立場より國家の威力を増進する抱負を以て増師案を斷行すべく凜然として一步も退かぬ態度を示した、從來ならば衆議院にて否決されても貴族院にて之を復活せしめ、茲に兩院の妥協を求むるのであるが、有業大隈伯丈けに斯る卑怯なる非立憲的態度に出なかつた、即ち桂公の從來試みた女性的態度を廢して男性的態度を採つたのである、此の男性的内閣に盾突かんとする反對派の旗印が鮮明を缺いたり、其手段に不公明の陰謀が潜んで居ては、人氣の取れぬも無理はない、江戸つ兒は曰く出

直せ々々。

國民黨の薩派に對する忠勤振り

國民黨が隈閣の海軍擴張案には賛成し乍ら増師案には反對した手際の鮮かき、是で薩派への御用振りも立派に勤まつたと云ふものだ、而も總務の犬養は立國上益々多數の精兵を養ふの必要があるに云ふ意見なのに、増師反對とあつては辻褄が合はぬと思ふと、ソコは如才ない先生丈けに前以て一年兵役論と云ふ窮屈の遁路を開けて居る。一個の書生論としては一年兵役説も面白からうが、苟も責任ある政治家の言説として斯る危険の立論が天下に通用するだらうか、窮すれば濫すで流石の冷血先生も近頃少々逆上加減に見受ける、尤も兵役期間の短縮を補ふ爲め小學中學の生徒時代から漸

次兵役の素養を與へると云ふ議論のやうにも聞いて居るが、夫れでは生徒に持たす鐵砲代だけでも、二個師團の増設費に十倍百倍の經費が懸つて、町村の財政は之が爲に蕪張つて了ふと云ふ話である、是では眞面目の顔で「我黨の經濟的軍備擴張」とも言へまい、大隈伯は皮肉つて、犬養の一年兵役論は名案なれども内容が秘密ゆる贖否することが出來ないと云つて居るが、無邪氣の綱堂爺さんも卻々隅に置けない。

總選舉の旗幟

昔の旗印は八幡大菩薩でも、南無妙法蓮華經でも軍さが出来たが、立憲國の政戦は是では不可ぬ、知らず今次の總選舉に對し朝野兩派は如何なる旗印を押立て、鎬を削るだらう、此點に於て政府は議會の解散者たる丈に

割切なる夥多の宣戰理由を有つて居る、即ち政府案に反對黨の反對した重要なるもの、みを擧げて曰く増師問題、曰く治水費問題、曰く海軍擴張案、曰く政務官設置問題、曰く公債政策問題を始とし、反對黨が外交問題に關し愚劣なる質問を連發して國家の立場を無視したる罪惡等を數へ來れば、黑白を國民の批判に訴へ選良の改選を要求する堂々たる理由が自から立つ、然るに政友會は如何、肝腎の増師案も楠瀬前陸相に對して本年度より實行するの誓約を爲し居れるのみならず、曾ては山縣公にも賛成の意を仄かして居る、故に此問題を以て旗印とするに於ては所謂刑狀持ちの訴訟たる譏りを免れない、殊に滑稽なるは政友會は解散の前日に及んで、我黨は決して増師案其ものを否認する者に非ざるも、隈閣に對する行懸上反對

するのであると申込んで居る、夫では政友會の政策政戦は理性的でなくて感情的と云ふ事に爲る、而も吾輩は敢て之を怪まない、由來政友會の遣方は陋劣なる術數と隱險なる陰謀であつて、其れが總て女性的待合的である、此種の策法は四疊半に於て一種の情劇としては説明が出来るかも知れぬが國民の前では説明が出来まい、要するに今次の總選舉は其の旗印に於て既に政友會に敗色がある、古い文句だが驕る平家は遂に久しからずと言つて置く。

總選舉と政局の將來

大隈伯に政治を遣らすか遣らさぬかの問題は則ち又候政友會に政治を頼むか頼まぬかの問題である、問題は極めて簡易で此の問題を解決するのが今

次の總選舉である、蓋し如何に健忘性なる國民であつても、彼の時には閥族と妥協して政弊を醸し害毒を流し、時には海軍の醜類を擁護して正義を虐げんとし、横暴二十年、有りて有らゆる罪惡を重ね、不正の名利に酈溺して來た政友會をして、今又政權を乗らしむるの勇氣は有るまい、ソコで消息通は總選舉の結果を豫想して斯の如く觀測して居る、即ち政友會は宿年の惰力により百名の再選議員と四五十名の新議員を贏ち得るに止まりて、絶對多數黨の位置を失ひ、同志會は隈閣の嫡兒たる關係上、百四五十名を出すべく、國民黨は隈伯と絶縁し薩派の走狗と爲りて政友會に操縦され、痛く同情者の同情を失ふたるが爲に結局十二三名に減少して政治上の存在を喪ふに至るべく、其他の數は中正會、無所屬、中立に分割さるゝも

の殆ど全部は非政友派なるが故に、政府は左袒するを疑ひを容れず、是の如くにして現内閣は磐石の如く安泰なるべしと云ふのである、蓋し此等の觀測が當を得たものと見て可からう、憐れむべきは國民黨の末路である、龍頭蛇尾も兎の年だけに、初めは脱兎の如く終り處女の如しの格に嵌つて面白い。(大正三年十二月)

第十一章 總選舉前の政界

新内相と新農相

大隈内閣成立以來缺員となつて居た内務大臣の椅子にも、漸く議會の解散の結果、總選舉實施を控へて正月に入ると共に、早速大浦子が其の缺位に廻はり、農相の後任としては黨界の元老河野盤州翁の新任を見、内閣は茲に全く勢揃が出来、旗鼓堂々、敵陣に當たる氣勢を帯び來つた、先づ新年早々大浦内相と河野農相に御目出たふと挨拶して置く。

大浦内相の評判

大浦内相に對する評判を聞くと、兒分の縣知事連は、子もこれから腕が

揮へるであらう、大浦様々と恐悦の有様で擔ぎ上げ、其の警視總監時代に、不正事件で監獄へほり込まれたワイ／＼の新聞記者連は、己れの不正行爲は棚に揚げて、探偵政治家だと毒つき廻り、農相時代に利權頂戴の上で御用商を營まんと出願して蹴ね附られた政商連は、融通の聞かぬ男だと申して居る、矢張り大浦の御大は正直一徹な處が一番の取柄ぢやと云ふのが本統らしい。

河野新農相の評判

盤州翁は黨界の元老ではあるが、農相として適任か怎樣かと、試に世間の口を叩いて見ると、實業家連は異口同音に、河野農相の適不適と云ふのが野暮でげす、國會請願以來の黨帥を長い間無位無官の儘にさし置いて、御

氣の毒様で御座いましたに、マア、運好く大臣に御成りで、極樂往生を遂げらるゝ事が出来ましやうよと云ふ挨拶、政友會の舊自由黨の連中も亦道がに河野萬歳を唱へ、東北の同志會の末社連はマア己れの方も東北振興を遣つて呉れる大臣を出した哩と、得意顔に傲つて居る。

大石入道の禪逃

さて河野を農相に祭り込んだ大石入道は、六十一年一夢の如しと云ふ一言を残して、六十一の還曆を口實に政界から引込んだ、そこで是れは加藤男と衝突の結果と傳ふるものもあれば、内相に成り損ふて、不平の餘り焼け腹で隠退したとの取沙汰もあるが、中野の別荘に面壁九年を始めてをる入道に聞くと、何んの理屈はない、一寸禪の發作で罷めたのだ、又直ぐ遣

ると云ふて居る、して見ると入道の禪逃は一時の事で、又々政界に飛び出して來る日が必ずあると保證して置く。

裁松大石を失ひたる同志會

同志會が生れた時分には、大分アヤフヤなものであつたが、時が立つと段々と強くなつて、大石入道は禪逃しても、同じ土佐派の片岡直温とか、仙石とか、富田とか云ふ連中は、必死となつて黨勢擴張に忙しい模様、それで別に動搖も苦情も何もなし、同志會は總選舉を機會に益發展せんとする形勢で、先づ天下は無事泰平と謂はなければならぬ。

政友會内の暗闘

さて政友會は政府反對とあつて御都合主義の喇叭を吹き廻すかと思つて居

ると、原の總裁を始めとして、大岡、元田、高橋、奥田、床次の各幹部連中が頭を並べて謀議を凝らして居る様ぢやが會の軍資金を握つた岡崎が、政友會の官僚打破と曰ふ譯で、肝心な軍資金を出さぬどころか、却つて兇分どもを集めて幹部反對を遣らして居るので、幹事連が頭痛巻鉢で、身動も出來んさうな。

野田東拓と改野満鐵

大隈内閣が議員の半官半民の會社の重役兼任を許さぬと云ふ方針を執つたので、野田は東拓の副總裁を罷めるか、議員になるかと云ふ問題で苦悶して居る、満鐵理事の改野も同じ問題で頭痛最中、原敬は兩人を自宅に呼び付け、兩人の嚙付を許す代りに、當選必勝の候補者を出せと迫つたので

兩人とも位置には居たし、代りは無しで、未だに進退を決せぬと云ふ話じや、利權黨の政友會に此種の人物の多數居るのは當り前ぢや。

不運の國民黨

憲政の神が八百萬の神に下落してから此の方、國民黨の振はざること甚いのであるが、それでも存外盲目の多い世の中で、木堂が言ふ所は大隈の言ふ處と信じて居つた所が、大隈が内閣に立つてから、犬養が援助するかどうかと思ひの外、盛んに反對をやらかすので、是れでは神様に一盃喰はされたと今更の如く吃驚して、續々神棚を卸して支部解散と云ふ始末。

動搖中の國民黨

去年の十二月解散當時には我黨は次の選舉に八十名の議員を出すなど茶

喇叭を吹いて居た國民黨の幹部連も、近頃になつて見ると其の半數も候補者に立ものがないと御座つて、今は三十五名とやら云ふ不景氣の眞最中に福井、栃木、静岡、奈良、兵庫、滋賀等の地盤も、日は一日と動搖の勢を高め來り、昨今の模様では犬養總理の岡山根據地にまで、意外の不安が持ち上つて居て、誰れ云ふとなく犬養は不埒な奴ちや、趙括流の生兵法家ちやと唱へ出して、一犬實を傳へ、萬犬聲に吠ゆると云ふ状態である、狐の神様に摘まれて居た田舎の政客の今更怒るも無理はない、此等正直一遍の政客は、單に大隈に反對したと云ふ丈で、既に憤慨して居るが、其れはまだしもの事である、結局國民黨として十四五名の代議士を選擧せしめ得れば關の山ぢやと、消息通は談て居る。

國民黨の元老守此先生の脱黨

國民黨中、昨年末から今年にかけて脱黨したものは再選希望の清水仁三郎、小西和、土方千種の連中が筆頭であつたが、守此先生は國民黨の政務調査會長と御座つて、黨中では却々の元老で、御喋舌の守此先生と云はれて居つて、同時に又犬養總理の手飼の國士とやらで、「天下の耳目」と云ふのでなしに、守此先生の自讃に據れば、「野鯉」とやら云ふものださうで御座つた、其が今度は愈野鯉の根性を發揮して、脱黨と出られたので、其の裏面の口實を聞くと、政國合同に反對、薩派提挈に反對、天下は二大政黨に限ると、大々氣焰であつたげな。

血迷へる國民黨の内幕

守屋此助先生まで取遁した國民黨は、一陽來復に先つて已に秋風落葉と云ふ有様で、殊に肝心の日本一の國民黨の根據地が、動搖しかけたと云ふので、其頭痛煩悶は並大抵でない、到頭繃縫策として政友會に涉りをつけ、所謂政國合同を立場として、大隈黨の有力なる地方には、聯合の旗印の下に、何處迄も總選舉場に突貫すると云ふ事に決めて居る、それでも實際に勝てそうな模様もない、唯無暗矢鱈と申譯候補者を出して空景氣を付くるだけの事で、結局天下の物笑ひになるらしい。

政友會の陣笠

政友會の内幕は怎樣であるかと思ふに、昨年の議會に於いて田舎の田吾作議員には、議會は大丈夫解散しないと一盃喰はし、少し惻好な連中には

歳費の殘金三千圓を支拂ふとやらの約束があつて、幹部盲従と出させたのは好かつたが、さて愈解散となつて見ると、官僚系の幹部と岡邦との反目が却々に面倒で、御用金の金庫の鎖が却々に啓かない模様で、原總裁も内部調和に手古摺つてをるとやらの評判だ。こんな始末で地方に歸つた陣笠や、田吾作連には、運動費が今以て廻らぬと云ふので、何の事はない案山子の立往生の姿で、いやはや御笑止千萬。

傳染病研究所と政國兩黨

傳染病研究所の所管替は不都合であつて、大隈内閣に反對したのは政國兩黨の同盟軍であつたが、傳染病研究所は有體に云へば北里博士の罪惡研究所であつたらしい、其の會計の役に當つて居つたものは北里の御親類筋

で、福原次官が事務の引継ぎに行つて見ると、帳簿の不整理は申す迄もなく、會計の不始末と來たら尙一層甚だしく、器械としては顯微鏡の外何物もなかつたとやら云ふ話で御座る、此の天下の公盜を辯護にかゝつた政國兩黨の辯護の理屈は、消息通の樂屋では、一一指彈の種になつてゐる。

公盜擁護一點張の政友會

昨年の今日此頃は海軍收賄事件の辯護を、政友會が一手で引受けた結果國民公憤の勃發となつて、巡査に頭を斬られた通信員もあつた、權兵衛さんは武士道の訓練を経た軍人には、收賄者は一人もないと虚言を吐き廻し原敬は巡査の抜劍したものは一人もないと辯護したが、其の舌の乾かぬ内に、海軍から泥棒が出る、通行人の頭を斬つたと自白する查公が出ると云

ふ顛末で、虚言を吐く事と泥棒の辯護をする事は、政友會の旗印とあつたが、今度も亦公盜北里の辯護の爲に狂奔して居る處を見ると、政友會と天下の公盜とは、御親類筋になつて居るらしい、どちらが親分でどちらが兒分が、此判決は天下の公論に任して置かう。

研究所の六本柱を自殺せしめたる北里博士

事は舊聞に屬するが、傳染病研究所の所管替が起つた當時、北里は北島博士以下に迫つて同盟罷工に出でしめた、六人の博士連は國家の爲なれば如何なる處で、如何なる監督の下に研究するのも同じ事だと云ふ立場から北里博士に留職を懇説すると、博士は頑として應せんので、到頭連袂辭表と云ふ事になつたが、今となつては北里の評判ガラリと變つて、天下一人

の同情者がないので、六博士は殆んど途方に暮れて居るげな。

北里博士と青山博士

北里博士の出た跡釜の所長の椅子を、北里同學同縣人の緒方博士が狙らうて居つたが、學者としての信用乏しく、北里程の辣腕もないとあつて、然う甘く問屋が卸さないで、所長の椅子は、アチラコチラねと持廻つた揚句、人格と學識に於いて衆望の歸する青山博士に落ちたのである、博士は大隈伯の碁の相手で、一週間に一度は早稻田に參謁して碁を打つそうな青山博士は刀圭界で政治家と云はれるのは、伯の喇叭を請賣するので、何時の間にもやら政界通となり濟した。今度所長になつたのも、全く大隈伯の信任を受けた結果ぢやと云ふ人もゐる。

恥を知らぬ山内中將

海軍收賄事件の結果、進退惟れ谷まつて、ウイーカームより献上のビストルと、アームストロングより献上の鉛製の短刀とで、狂言自殺を演せられた山内中將は、權兵衛一派の罪惡の犠牲となつて、餘儀なく此くの通に出て見たが、以來病氣全快後、海軍中將の任をも辭せず、貴族院議員の職をも辭せず、相變らず男爵ですまして居る處は、面の皮の千枚張と云はなければならぬ、權兵衛殿も早く當人に因果を含めて、自分の身代りと速に權威ある社會から隱退せしめては如何ぢや、何時までも蛇の生殺しとは可愛さうでは御座らぬか。

墮落したる貴族院

皇室の藩屏、國家の元勳を以て組織されたる貴族院が、山内中將の不始末事件を知らぬ顔の半兵衛で、何等の辯明を山内中將より求めずして居ると云ふ事は、一方から見れば貴族院が山内中將と同格の醜類の集合だといふ自白と云はなければならぬ、又皇室の藩屏たる男爵會が、之に制裁を加ふる事が出来ないと聞いては、我が貴族院も男爵會も、好く好く腐敗したものでちやと、國民に呪はるゝだけは否認が出来ぬ。

米價調節と一般の人氣

大隈内閣は米價が下落して、地方の農家經濟が窮地に陥つて居ると云ふので、其の救済策として千五百萬圓支出することにしたので、東京に於ける商賣人の評判は意外に悪い、是れと反對に地方に於いては大隈様々で、

所在の農民は理想高遠なる世界の偉人、大隈伯閣下とばかり、隨喜の涙を流して居る、東京で悪いと云ふのは、根が商賣人根性で、安い米を喰はうと云ふ齋な考から、大隈伯に毒付く政友會の機關新聞の喇叭ちや。

大隈伯後援會

政界には關係なく、單に早稻田伯に個人的關係のある連中が、老軀出盧の大隈伯をして御大典を無事に濟させ、名譽の退隱に有終の美を成させたいと云つて、頻りと東奔西走し、結局大隈伯後援會の組織が出来て、市島謙吉と云ふ、古い改進黨の代議士が、其の會長になつたとやらの評判で、これから處々方々に遊説と御座るらしい、都下に於いては先月の十六、十七日に大會が開かれて、地方からも第一流の有志が盛に出揃つたと云ふ好

結果、伯は例の長廣舌を揮はれて、遠來の客を犒はられ、満堂の後援者は孰れもホク／＼満足の體であつたらしい、本月は更に關西大會を大阪に開くと云ふ嘶であるが、人氣の好い事は素破らしいものである、唯其の組織が不完全で、種々の風評が高く、上滑りちやと云ふ京童もある、油斷は大敵、御注意肝要と警告して置く。

元老と大隈内閣

大隈内閣は官僚化したといふことを天下の愚民を瞞着するの口實として政國兩黨は毒吐いて居るけれども、元老側に廻つて聞くと、今日の大隈内閣に對しては、元老は少しも好意を持つてをらぬ、松方侯と大山公とは極力之に反對で、井上侯と山縣公とは例の閥族の陰謀手段を以て、之を潰す

ことは放屁するより易いけれども、之を潰して誰れを後釜に据るか云ふこと、誰も適任者がなから、此の極寒中に又々内閣難産の産婆役を勤めるのがツライと御座つて、暗に反對を閃めかして居るげな、大隈はヤハリ六千萬國民の友人であつて、元老の敵である哩。

現内閣と貴族院

元老は暗々裡に反對であるが、貴族院は怎樣かと云ふと、大隈伯に四分の三の反對と云ふ猛烈な意氣込である、貴族院は非立憲の寺内伯を總理大臣に擔がうと云ふ魂膽から、官僚系の民黨主義は大隈には全然同情がない是に於いて乎、國民にして大隈内閣に善政を行はす積ならば、此の際一奮發せんと往かんと云ふ形勢ぢや。

政薩國の反抗運動

此の形勢を見て取つた陰謀家の團結たる、私黨朋黨の薩派と政國兩黨は此の際を機會として大隈隻脚伯を仆さうと陰密に計畫して居る、其處ちや、此の輩に若し公明正大なる主張があれば堂々と大隈反對の聲を揚げて、天下の公論に問ふが好い、議會では口が開かず、自分が代つて内閣を組織しても今一段の善政が出来ると云ふ抱負もなしに、唯矢鱈に政權争奪にのみ騒ぎ廻る所を見ると、政薩國は怎樣見ても天下の私黨で、國民の賛成を價する譯に往かぬ哩。

同志會の活動

凭樣なつて見ると、元老と貴族院と政薩國を大向ふに廻して、自分一本

立て六千萬の國民を見物客に、一芝居打て見ようと云ふ七十八歳の大隈伯には、その自負の大きいだけ、其の決心の強いだけ、六千萬の國民も大に伯を後援して、其唯一の與黨たる同志會を鞭撻して遣らなければ義理が濟むまい、同志會も今此處で一番活動しなければ、立憲以來の面目が立つまい、加藤男も大浦子も大に遣るさ。

理想選挙と同志會

さて同志會其物は、在來嘗て保護會社に、御用會社に、全く縁故のない純潔なる國民本位の政黨であるから、その理想の高遠なるだけ、出所不明の軍資金のないだけは事實らしい、同志會も又左様なものを當にせず、正々堂々と理想選挙、言論文章で戦ふが立憲的兵法ぢや、國民も此の義氣

を買つて大に助けて遣るか好い。

大浦内相と選挙取締

大浦内相は地方長官と警部長とを集めて、選挙取締の勵行と投票の神聖とを説明したが、我輩も其の説には理論として賛成ぢや、要するに運動屋の古狸と云ふものは、何れの地方にも澤山跋扈して居る、地方では之れを羽織ゴロ、洋服の油蟲と云ふて居るげな、此の昆蟲類の營業的運動者を嚴重に取締る事が實際に於いて必要である、地方の選挙は何程も腐つても居らぬ、是等の商賣人と御大典に参列したいと云ふ成金の輸入候補者を取締ることは、選挙の神聖を維持する爲め最も肝要の事であるから、是れを國民の寇敵として、之が驅除の爲に極力選挙法を勵行するに非ざれば、政界

革新の舉るものでないことだけは、六千萬の國民と共に明言して置かなければならぬ。

總選挙の豫測

さて選挙界の候補者は政友會が何名、國民黨が何名、同志會が何名と云ふて見た處が、確かな觀測はつかぬが、誰れが見ても天下の愚民を最も巧妙に瞞着したる國民黨だけは、最早亡ぶることに決つて、政黨としての存在の價値を失ふべきことは、何處に往つて見ても定論となつて居る、問題は唯同志會勝つか政友會勝つかである、双方共已惚タツブリであるから、いづれも二百名と觸れては居るが、それは勿論當にならぬ、兩派候補者活殺自在の權利は、六千萬の國民の掌中にあるから、今度の選挙は實に國民

政治思想の健全であるか怎樣かの試験石である。

當にならぬ中立候補者

政國兩黨の評判が、意外に地方で悪いと御座るので、原敬は憲政の神様と御協議とあつて、選舉界の自黨候補に、成るべく大隈伯を後援する様に云ひ觸らさして、當選した上は政友會なり國民黨なりへ宙返りをなさしめて大隈伯に一盃喰はさんと目工論で居るから、六千萬の國民は大隈伯後援會公認候補者歟、若くは同志會の候補者の外には投票せぬと云ふ事にして向はないと、此の政國陰謀に乗せらるゝから、此の處御用心が肝心々々。

日糖事件議員の再選運動

砂糖を甜めて胃腸を害したとありて、市ヶ谷の監獄病院へ入院して居つた、換言すれば公職を害用して私利私欲を貪つて刑事被告人となつて居た連中が、此の際又々候補者に立つと云ふ評判である、いや鼻持がならぬ哩、國民が凭んな前科者を再び選舉する事になると、日糖事件の犯罪を、従前の通り繰返して差支へなしといふ裏書をする事になるから、此の委任狀を六千萬人の國民が出さぬ以上は、此種の醜類は選舉場より驅逐することに盡力して貰はねば何うも成らんで。(大正四年一月)

第十二章 天下分目の總選舉戰

分水嶺に立てる國民

大隈首相は既に立憲的態度を以て内閣の信任を國民に問へり、國民たるもの亦立憲的態度を以て總選舉に臨まざる可らず、知らず國民は既往二十有餘年間、閥族に媚び官僚に結び、憲政を紊り國民を虐げ專制横暴を極めたる政友會に與する乎、將た過去三十餘年間、常に逆境に立ちて閥族と戦ひ官僚と闘ひ、政黨内閣、議院政治を理想として之を鼓吹し來りたる大隈老伯を援くる乎、國民は今正さに分水嶺に立てり、右するか、左するか。

大臣の立憲的遊説

強將の下に弱卒なく、長廣舌の大隈首相を戴ける現内閣は、蘇秦張儀の材に富めり、曰く武富返相の莊重なる辯舌、曰く河野農相の沈痛なる辯舌、曰く尾崎法相の警銳なる辯舌、曰く若槻藏相の滑脱なる辯舌、孰れか是れ天下の珍たらざる、而して是等閣僚は轡を駢べて都門を出で三寸の舌鋒、天下を薙ぎ靡かさんとす、請ふ立憲大臣の天晴なる凜々しさを見よ、斯の如きは從來の官僚政治、妥協政治、乃至半閥半黨的の政友會内閣時代には曾て睹ざる所、亦以て現内閣の立憲的態度を證するに足るべし、庶幾くは其の口角の泡沫を硯海に移して、偽黨撲滅史を草せんか。

お伽噺し蛙の逆見

政友會の原總裁、對選舉協議會に對戰演説を爲して曰く、「大臣自ら國務

を棄て、各地に遊説し、臺閣に列する人に有間敷き言動を敢てし憚からず、過去二十年來總選舉は幾度となく吾人之を見れども政府として此の如き行動を執りたるは未だ曾て見ざる所、斯の如くして果して憲政有終の美を濟し得るや吾人は現内閣の行動を以て憲政の逆轉なりと斷せざるを得ずと、血迷ふたり原君、國務大臣自ら出馬して、政府の主義政策を國民の前に演し、内閣の信任如何を天下の批評に懇ふるは、則ち是れ立憲の大義にして又議會を解散したる旨趣に叶へり、過去二十年來、既往の官僚政治、非立憲内閣に於て未だ曾て行はざりし事を、現内閣に至りて初て之を行ふたは即ち憲政の進歩なり、然るに之を逆轉と曰ふ、お伽噺に謂ふ「蛙の逆見」は是なり、知らず政友會は從來の藩閥出身の元老及び官僚政治家の爲

し來りたる所を善しとし、之に裏書せんと欲する乎、蓋し窮すれば濫す眞に渠等の謂なり。

天下の分野定まらんとす

帝國に於ける政界の磁力は、寢臺列車の駛る所に在り、換言すれば天下の風雲は政治上の中心なる東京と、經濟上の中心たる大阪との中間に於ける人氣の嚮背に依りて定まる、是れ東京、横濱、名古屋、京都、大阪、神戸の六大都市が總ての勢力に於て日本を代表し、日本を指導するが故なり、然るに是等各都市に於ける政友會の勢力は今や全然、粉塵され、撃退され殆ど死屍も留めざるに至れり、敢て懲慙す、政友會總裁原敬閣下試みに寢臺列車に搭じて新橋以西、東海、近畿の形勢を一瞥せよ、庶幾くは又天下

の分野定まる所を察知するを得べし、唯夫れ吾人は原君の白頭、更に白髪を加へしむるの餘地なきを憾みとす。

魯庵將軍の形勢觀望

魯庵先生と言へば詩人めきて風流なるも、其れが寺内將軍と知りては閔族の遺孽だけに、人をして一種の惡寒を感せしむ、先生現に朝鮮總督の職に在りて、居然疇昔に於ける韓王の位置に据り、鷄林八道の新國民をして其の脚下に拜跪せしむ、亦た人生の快事たるべしと雖も、邊疆の地に在りて閩外の臣たるが如きは、閔族の遺產相續者たる先生の能くし得る所に非ざるを奈何せん、蓋し大隈内閣が立憲的理想を遂行する爲め、寸々分々、官僚を壓迫し朋黨を擯斥し、着々其の基礎を固むるを見ては、或點に於て

俊寛法師、鬼界島に在りて平家の跋扈を聞くに似たるの感想を起す節もあらん、普通ならば急ぎ都に馳せ歸り、宿縁淺からざる政友會を踏み臺とし先生一流の陰謀的新脚本を書き卸す幕なるも、生憎、天下の形勢は足下の御注文に應せず、所謂形勢觀望も一種の煩悶たる新説明を政界に示しぬ。

政友會の末路と清盛の最期

政友會が官僚の尻を叩き、寺内總督を昇ぎて政權を回復せんと欲する熱望は、寺内總督が政友會を利用せんと欲する希望よりも更に甚し矣、政閥提携の説起りては消滅し、消滅しては復た起る所以のもの決して偶然に非ざるなり、蓋し俚謠に謂ふ「鐘が鳴るか撞木が鳴るか、鐘と撞木の合が鳴る」は、即ち此間の消息を説明するものなり、然るに政友會の危急今正に

漏甕を捧げて水を烈火に投ずるの状なるに拘はらず、魯庵將軍は短梗、深井を汲むに由なしとして容易に動かざることを前記の如し、政友會の煩絶悶絶知るべきのみ、驕る平家は遂に久しからず、政友會の末路何んぞ其れ清盛の火の病に相似たるや。

後藤男の暗中飛躍

政界の冷飯草履を以て稱せらる、接霞先生事、後藤蠻爵、例に依つて聊かも納まり切れず、天下の分野を展望して以爲らく、政友會の旗幟甚だ振はずと雖も、素と是れ天下に蔓りたる絶對多數黨なり豈に今朝一回の決戦に崩潰し盡すの理あらんや、大政黨の勢焰大に揚ると雖も、豈に復た羅馬の城一夜に成らんや、朝黨捷つも野黨地に舐れるも其の決勝の差は僅少の

頭顱に止まるや必せり、遮莫、乃公の暗中飛躍を試むるは此時此機に在りど、是に於て乎、所謂火事場泥棒的の計畫起れり、其の目的は自己の系統より二十名内外の議員を選出せしめ、以て議會にキャッチングアウトを獲んと欲するに在り、政治を博奕の如く、政界を賭場の如く心得居れる接霞先生としては、蓋し其の柄に嵌りたる目論見なりと雖も、這般の蜃氣樓的計畫が果して圖に當るや否やは大なる疑問なり、諺に曰く善く泳ぐ者は溺れ、才子は其才に倒ると、蠻爵たるもの相馬家陰謀事件の失敗を再演せずんば幸ひ也。

蠻爵の脱線は脱線に非ず

桂公の同志會を組織するや、これが創立委員たりしものは後藤蠻爵なり、

當時蠻爵は揚言して曰く、我れ伏兵を政友會内に置けり、乃ち四十名を招致して政友會崩潰の端緒たらしむべしと、然れども事實は一個の奉納燈をも献する者なく總て蠻爵の夢幻たりしなり、後ち同志會を脱するや、又た傲語して曰く、我れ一たび去らば二十名の殉死者ありと、然れども事實は後を追ひ奉る一人の小金吾なく、一僕の筆助も無く、總て蠻爵の空想たりしなり、今回の二十名計畫亦甚た覺束なき沙汰に非ずや、世人之を名づけて後藤男の脱線と曰ふ、而も脱線は一定の軌道を有する者に對しての語なり、最初より一個の軌道を有せざる蠻爵に脱線するの資格あらんや、畢竟、浮草の流れ何くに春を待たらん、是を知るものは水の行衛のみ。

政界の二人三脚競走

政友、非政友兩派の懸隔少かるべきを見越し、議會の決勝權を寡數の第三黨に收めんと欲し、虎視眈々たる者に猶ほ一個の犬養黨あり、而も渠等の第三黨を標榜して之を誇張するは、一定の軌道を有せざる小野心家、政治家、小不平家を驅り集めんとする口實のみ、今日の犬養黨は第三黨たるの色彩をも失うて政友會の附屬黨と爲り了れり、是れ薩派の傀儡黨たる生地が漸次發露するものにして隨つて蔽へば隨つて顯る、所以なり、即ち現下の政界に「二人三脚競走」を爲せるものは、政友會と薩派及び犬養黨との連結運動にして、一脚の蹉躓を來せば他の一脚も顛倒し、所謂非政府軍は政界に匍匐するの已むなきに至らん、於虜、木堂夫子、口は未だ嵌せられずと雖も其の脚の鎖を奈何せむ、右脚を朋黨と結び、左脚を閥族と結

びて尙且つ悍馬の如く政界に馳驅せんとす、亦難い哉、犬養黨の振はずして残陽の孤壘を鎖せる光景に髣髴たる、所謂宜なりと謂ふべし、誰か白張の底抜提灯を押立て、國民黨の殘骸を見送る者ぞ。

黨の巢に育ちし杜鵑

杜鵑は子を育つるの術を知らず、鶯の巢に入りて産卵す、鶯之を孵化せしめ之を飼育す、而て杜鵑の漸く長するや鶯を屠りて己の餌とす、彼の犬養木堂が改進黨乃至國民黨の巢に飼育せられ、今に及んで大隈内閣を屠り鴟梟の欲を逞ふせんとす、何ぞ其れ鶯の巢に育ちたる杜鵑に相似たるや、渠は實に政界の杜鵑なり、而も伯老いたりと雖も是れ尋常の金衣公子にあらず、渠れ犬養黨今や自ら亡びんとす、亦政界近時の一快事と謂ふべし、

憫殺す時忘れし羽拔鳥、天尙ほ寒く枯木蕭條を奈何せん。

口幅の廣き犬養黨

聞いて癢に障るは渠等が自ら謂ふ「清節三十年」なり、三十年は偕て措き、二十八年前の犬養木堂は改進黨を脱線し、自由黨の分身を以て目せられたる宿仇後藤象次郎伯の大同團結に馳せ參じ、其の傘下に加はりたる一首魁たりしに非ずや、二十年前の渠は中國進歩黨の一遊星なりしに非ずや、其の頃の關橋村（直彦）は吏黨機關紙の御用記者たりしに非ずや、疇昔の鈴木梅四郎は井上系御用商人の走狗たりしに非ずや、其他の有象無象に至ては殆ど皆な新米雛の黃吻兒のみ、何をか以て清節三十年と言ふ、徒らに國民黨の名を振り翳して他の政友の功を偷まんとするが如きは、畢竟する

●に●龍●蛇●の●脱●ぎ●棄●て●た●る●脱●殻●を●冠●り●て●自●ら●龍●蛇●と●云●ふ●に●均●し●、●何●等●の●醜●、●何●等●の●陋●。

政黨内閣期成同盟會

近頃最も滑稽なる政友會の香具師的傀儡として現はれたる政黨内閣期成同盟會なり、曩に憲政擁護會の古看板を擔ぎ出して失敗したる結果、藻掻き果てたる末の智慧なるべしと雖も、些の反響を與へず春の泡雪と共に消ね去らんとするは何ぞや、曰く政友會に政黨政治を主張するの資格なければなり、若し強ひて政黨内閣の完成を主張せんとするに於て、立憲的なる現内閣を援けて、朋黨なる政友會を打破せざる可らざるの論理に陥るべし、何ぞ復た矛盾の太甚しき、吾人は大阪朝日が之を揶揄して寧ろ「吾黨内閣

期成同盟會」と改稱すべく勸告したるを聰明なりと信ず。

天下の事斯の一舉に在り

天下の形勢は、旭日天に冲りて群陰遁竄し、魑魅其の影を潜むが如く、大隈内閣一たび出現してより官僚屏息し閥族蟄伏し朋黨窒息し私黨雌伏し了らんとするの概あり、而して天下の事、今期總選舉の一舉に依りて定まらんとす、國民たるもの此の機會を逸せず、政界の廓清を實にし憲政の發達を圖らざる可らず、是れ所謂大正維新の鴻業を肇成する所以なり。

(大正四年二月)

第十三章 總選舉の結果と新政局

總勢二十四萬と註す

時は大正第四年春王三月、極東の立憲國に於て行はれたる總選舉の政戦は、候補者約六百名、之に隸屬する參謀、運動員、事務員、傳遞使乃至應援の有志、辯士、記者の數、一候補者に付き平均四百名と假定すれば、總じて二十四萬の軍勢が、東西南北、前後左右に入り亂れ擦り交りて、鎬を削りたる大合戦なりき、壽永の昔なる源平二氏の政權爭奪戦も此の壯觀には比すべくも非ざる也。

政府軍の大捷

盛者必滅、會者定離は陳めかしけれども、慘めなる政友會の大敗北は、坐ろに平家物語を讀むの感に勝へざるを奈何せん、然り總選舉の結果は、政友會百五六十名、同志會百二十四名、國民黨二十名内外なるべしとは政界通一般の豫想する所なりしが、事實は豫想に反し、最近まで絶對過半数黨を以て誇りたる政友會は、百七名の少数に減じ、政同二黨の境遇は順逆全く其位置を顛倒し、凱歌は到る處政府黨の陣中に起れり、即ち朝黨は同志中正、隈伯後援會の三派を合して、二百十名を超ゆるに反し、野黨は政國二黨を合して百四十名以内と註せらる、況んや爾後の無所屬亦た多くは政府黨に屬するに於てをや、勝敗の差に少くとも八十名の懸隔あり、政國二黨の將卒豈に螳螂の龍車に向ふの感慨なきを得んや、曩に憲政擁護運動の

大狂言大陰謀に、安祿山が甘泉の水に酔ひたるが如き夢は、今にして覺めたりや否や、無常を感ずるもの、獨り渠れ政國二黨のみに非ざるなり。

悲慘なる政友會の敗衄

政友會の候補者半は算を亂して討死す、其の敗衄は單に數の上に於てのみに非ざるなり、裨將大岡育造、原敬の御殿女中と稱せらるゝ奥繁三郎、伊藤大八、乃至鶉澤聰明、戸水寛人、竹越與三郎等の部將まで擧つて其の首級を敵軍に揚げられ、緋絨銀采配格の中橋徳五郎亦た功名の初陣に敢なき最期を遂げ、死屍壘々鬼氣人を襲ふの概あり、之を一方政府軍が河野、箕浦、武富、尾崎、島田、仙石、片岡等の領袖を悉く當選せしめ、爾餘の謀士鬪將簇として星座の輝けるに似たるの觀あるに比せば如何、在野黨の

陣容は索冀として眼も當られず、朝野兩黨の戰鬪は土俵に上る迄もなく、番附面に於て既に大相撲と宮相撲ほどの差あり、時恰も東皇、青陽に駕し、花笑ひ鳥歌ひ春風駘蕩として天下に満てるに似ず、秋風獨り在野黨の陣營を鎖す、知らず原君たるもの垓下に四面楚歌の聲を聞くの感なきを得るや、否や。

秦を滅ぼす者は六國に非ず

左るにしても多年政權の氛園中に培養せられ、近く三十五議會解散間際まで、二百三名の多數を制したる政友會が、如何なれば斯まで一時に凋衰したるか、此問題を説明するには、既往二十餘年間に亘る政友會の罪惡を數へざる可らずと雖も、一言以て之を蔽へば曰く、秦を滅ぼすものは六國

に非ず、秦其れ自身なり、政友會を滅ぼすものは政府黨の聯合軍に非ず、政友會其れ自身なり、殊に黨首たる原總裁が、天下分目の大決戦に際し乍ら、味方の苦戦を餘所に見て、一步都門を出でず、口を緘して尻透りしたる一事は、外、大政黨たるの威信を墮し内、味方の士氣を沮喪せしめ、遂に今回の如き大敗衄の近因を爲せり、而も是れ原總裁本來の面目なり、國務大臣の出馬遊説を以て非立憲的行動なりと嘲りたる、渠れ政友會の首領が官僚式を發揮して絹蒲團の中に懶眠を貪りつゝありたるは、論理に適ふたる自己本能の自然的行動なり、若し政友會にして眞に立憲的に蘇り、頽瀾を未倒に回さんと欲するに在らば、渠等は先づ原總裁の退隱を促さる可らず。

的外れの國民黨

院内交渉團體の資格をも失ふべしと豫想されたる國民黨が、二十七名の議員を選出し得たるは、兎も角も時に取つての成功なり、然れども黨魁犬養毅が當初豫想したる六十名に比せば、其の半數にも満たず、輿論の唐箕に簸び落されたる點に於ては、政友會と相擇ぶ所なし、斯ては所謂憲政の神様の估券に關すること夥しく、第一政府黨と政友會の對勢に百名以上の懸隔を生じては、第三黨としての働き場所もなく、寡數を以て雙方の多數を操縦せんとしたる方寸は、瓦落離と外づれたる譯なり、註に曰く、政友會の驥尾に附せんか、椽の下の方持に過ぎず、詫入りて大隈黨の提灯を持たんか、篝火の前に冗用の一燈を獻ぐるに異らず、即ち第三黨存在の意義其

ものが消滅したるものにして、是れ取も直さず弄策家犬養の政治的自滅なり、知らず礁上の難破船安くに活路を求めんとする乎、黨海の水も鹹きものと知れ。

拗ね者と事大政治家の迷岐

功利に憧がれつゝある陣笠に二種あり、即ち一は黨紀黨制の秩序ある大政黨に入りて、其の節制に束縛せらるゝを廻り遠しとし、自分勝手の熱を噴きて黨界を攪拌し、其間に奇捷を僥倖せんとする者、他は裏金の陣笠に甘んじて、黨首、領袖の後塵を拜し、其の政黨の威力に依附して功利を漁らんとする者是なり、前者は權道を好むものにして犬養黨（敢て國民黨とは言はず）に多く、後者は所謂事大主義者にして政友會に多し、類を以て

集るは即ち此謂にして、這次總選舉當選者の顔觸れに見るも此の徵象の争ふ可らざるを知るに足れり、然るに柳の下に必ずしも縮住まず、政府黨が懸絶せる優勢を以て絶對大多數を占めたるの結果、犬養黨は權道を施す能はず、政友會に投じたる者の事大主義も脆く空想に屬することゝ爲れり、今にして大隈黨に寢返りを打たんか、曩に政府軍を罵詈したる口禍の累するものあり、枉げて瘦我慢を張らんか、螳螂の斧の細きを奈何せん、迷羊岐路に泣く、亦憐むべきに非ずや、乃ち今期總選舉によりて斯の如き不健全なる權道的政治家、事大的政治家の心理作用に、甚大の煩悶と教訓とを與へたるは政府黨大勝の副産的獲物と謂つて可なるべし。

官僚の屏慮

大隈黨の絶對勝利によりて政國兩黨以上の打撃を受けたるものは官僚の一派なり、大隈伯の聲望隆々たりと雖も、羅馬の城豈に一夜に成らんやと見縊りたる渠等は、今次朝野兩黨の勝敗が至極僅少の差にて決すべきものと豫想し、際どき藝當を其の兩極の尖端に試みんと手に唾して待ち居りたり、寺内伯と政友會との間に微温の通ひたる、後藤男の第三黨計畫説の如き皆此の間の消息を語るものなり、然るに事實は豫期と全く齟齬し、政友會の踏臺にては内閣の櫓にも手が届かず、後藤男の暗中飛躍また畫餅に歸し、所謂官僚の政權回復策は、落語家の曰ふ棺中に居りて香奠を數ふの愚に終れり、偁に曰く、憲政濟度、諸兇撲滅、官狗煩惱、頓生菩提か。

政界の新過去帳

大隈内閣の出現以來、官僚の運命斯の如く頓に窘蹙したるは痛快と言ふべし、殊に今次總選舉の結果、現内閣の壽命は向後少くも四五年は安全無事なるべく、而して大隈首相の意見は此間に政黨内閣の資質を充備し、他日内閣明渡しの際には、其の後繼者として政友會の首領を奏薦する考なりと言へば、今後憲政の發達は期して待つべく、官僚は其間に化石したるか然らざれば蛭の鹽に遭ふたるが如く、憲政の光明に射られて自然に溶解し去るべし、試みに之を昨春一たびは清浦奎吾子に依りて、新内閣組織を見んとしたる當時の政治に比せば如何、僅か一年間に於ける官僚の今昔實に隔世の感も當ならず、如何に最眞眼に見るも清浦平田、小松原等の政治的蘇生は最早設想する能はず、長閑の嫡系者たる寺内伯と雖も、今となりて

は既に永久に政權掌握の機會を逸し去り、過去帳の人物と爲り了れり、曩に官僚内閣の再現を夢み同志會に後足で砂を掛け、棺底の桂公を欺きたる後藤男、仲小路廉の徒、今にして如何の感かある、一陽來復、蟲、穴を出づるの時に當り、渠等は却つて自ら掘りたる穴に入らんとす、悲惨なる墓標は谷中青山の森林のみに非ず、黨界亡命者の運命亦慄むべき哉。

政國二黨の前途

政友會の策士連、自黨の悲運を啣ち、國民黨との合同を策せんとすと云ふ、然れども大正政變は政國二黨の聯合運動に依りて起りたるもの也、前議會は政國二黨の提携行動に刺戟せられ、解散せられたるもの也、今次の總選舉に政友會を援助したるものは國民黨にして、國民黨を庇護したるも

のは政友會なり、即ち此の兩黨は近時同一軌道の上を趨れるものにして、合同に缺けるものは唯だ形式上の手續のみ、自黨の利益と見ては寺内伯にも秋波を寄するを辭せざる政友會は、犬養黨を容るゝ雅量を有すべく、又薩派の走狗たるをも厭はざる犬養黨は、政友會と合するを寧ろ至榮とすべし、右顧左盼何の遠慮のあるべき、縁あるは宜しく結ぶべし、是れ二大政黨建設の要義にして議院政治を完全ならしむる所以なり、然るに道途別に傳ふ者あり、曰く犬養毅、自黨の將來を悲觀し、大隈黨の大組織行はるゝの日を俟ち、自己の位置を保留條件として該新黨に加盟するの意ありと、而も吾人は未だ犬養が去勢術を施したるを聞かず、今尙ほ渠も亦一個の男兒たるを信するが故に、此種風説を信する能はず、此の代呂物到底建設的

用材にあらざる也。

同志會の改造と政府黨の統一

呱呱の聲を擧ぐると同時に所謂大正政變の大迫害に遭ひ、尋で黨首桂公の永訣に遭ひ、更に後藤創立委員、仲小路創立委員等の出奔に遭ひ、艱苦備さに骨め盡したる同志會も、満月の翳雲を離れたるが如く、一躍百五十名に垂んとする議員を得、現下の黨界に覇を稱ふる事と爲れり、平家の迫害に遭ふて伊豆の半島に跼まりたる源氏の大頭公が、一決、馬を進めて富士川を渡ると共に、既に天下の一半を略したるの槩あるを見るべし、然れども敵の殘虐に酬ゆるに殘虐を以てし、得意の半面に伴ふ猜疑の爲め骨肉相食み外戚を敬遠して却つて禍を蕭牆の内に醸したるは、鎌倉幕府の倒れた

る所以なり同志會たるもの政友會の横暴に報ゆるに横暴を以てし、黨員相疑うて内訌を事とし、外戚たる中正會、隈伯後援會杯を敬遠して相疎んずるが如き事あらば、今回の捷利も鎌府十年の夢と倅しく、却つて噬臍の悔を買ふに至るべし、況んや早木は枯れ易く、早熟は落ち易きに於てをや、同志會の警戒を要するは逆境の日に非ずして順境の今日以後に在り、須らく謙抑自損以て政敵に接すると同時に、坦懷虚心、城府を撤して友黨を容れ、内、體制を改整し外、政府黨の統一を圖らざる可らず、是れ其の立憲の眼目精神たる二政黨大主義を實現する所以にして、又政權をヨリ以上長く維持する唯一の道なり。(大正四年三月)

第十四章 臨時議會と政薩國の反對運動

大隈内閣毒殺運動

先月の初旬から十五六日の各政黨の大會時季に至る迄、二週間前後の間に、種々雑多の經畫が政府反對の策士間に行はれたものであるが、中でも顯著なる一は内閣毒殺運動であつた、右毒殺の理由たるや、對支外交に大失敗を取つたと云ふのであつて、毒殺運動の發頭人は例の後藤巒野、仲小路廉、徳富國民、杉山洞丸、秋山定輔など申す自分免許の大政治家、大策士、實は政界際物師の定連で御座る、此等定連は朝鮮の寺内伯を内閣總理に戴いて、政黨に超越したる國家内閣とやら云ふ、長たらしい名前の新

派内閣を造るとやらで、元老連の幕下から現内閣反對の郎黨を狩集めて、如才無祕の暗中飛躍と御座つただけは善かつたが、時代に背いた目工論は土底から瓦落離と壞れて、失望落膽の幕を鼻とは何の事だ。

由來後藤巒野、仲小路など云ふ面々は、同志會の組織當時、大正の新時代にはもはや政黨でなければ行かぬ、元老はもはや凋落した、政黨を除いては、最早國事に當るべきものなしと云つた、桂公直接の教訓に感ずつていづれも政黨の洗禮を受け、其の幕僚となつた仲間ちや、其れが公の薨去となるご、直様事大主義の本性を著はし、桂公の三十日祭も未だ濟まず、棺の肉も未だ冷へぬに、既に已に脱黨と出かけて、加藤大浦に悪口を吹かけて逃げ出した連中で御座る、處が今度は又政黨に超越せる國家主義とや

ら云ふ長又で、大隈内閣毒殺を試むるとは如何にも名案と申したいもので御座るが、生憎天下の大勢一轉、官僚主義は昨日と過ぎて、政黨主義と變つた今日左様な骨董を持ち出して、買つて呉れる世間ぢやと思ふて御座る御當人等の無知無主義には呆れて仕舞ふ。

政薩國の聯合運動

さても第一次の隈閣毒殺の陰謀が失敗に終ると、早速第二次の隈閣顛覆の運動が持ち揚つて來た、其の運動者は何者かと云ふと、問ふまでもない政薩國の聯合軍、其の經畫はと承ると、大隈の爺骨が内閣を持つて居る間は、什麼算盤を弾いて見ても政薩の爲に利益ぢやとあつて例の後藤仲小路の仕事師を引こんで、御心ありの松方後入齋を總理に擔ぎ、泡好く御大典

内閣を仕組んで、一芝居打つて見ようと云ふので御座る、其處で其の内閣彈劾の手段はと承ると、第一對支外交の失敗、第二不當責任支出問題、第三選舉干渉問題、此等の問題を挈げて、先づ議會に於いて質問戦より火蓋を切つて、彈劾的決議案の提出に開展せんとの筋書で、所々方々に演說會を開催し、帝都の愚民を煽動し、例に依つて群衆運動を喚起し、之を指嗾して議會に押寄せ、大隈内閣に肉薄して、有無を云はさず蹶飛ばさんとの手筈ぢやげな。

燒打は非立憲的

儲又這個の群衆運動を喚起すには、一にも二にも軍用金の調達であるが其の内幕を搜つて見ると、其の出處は薩派の財閥と、政友會の高橋、中橋

さては後藤男の出入御用商人共ぢやさうな、此等の方面から掻集めた軍用金で、古物のフロックコートやら紋附羽織やらを山ほど買込み、所謂天下の浪人連や、其の日が喰へない不良青年等に着込せ、酒食に飽かせて、演説會場に自動車で送込む、其處に政友會の元田國東、床次低能、さては八百萬の憲政の神さんなんぞが出かけて、息の根の續かん限り、出鱈目の政府反對の喇叭を吹き立て、何の方面からなりと火の手を擧げようと云ふ魂膽ぢやと。

長い明治も過ぎ去つて、大正も四年となつた今日此頃、立憲政治の言論政治を、腕力沙汰や焼打政治と履き違へて、口を開けば憲政擁護を唱ふる癖の政國薩の御悞好連が、政府に對しては立憲的行動を要求しながら、蔭

に廻つては群衆心理を煽動して、焼打政治を行はんと云ふ始末、其れで國民の満足を買ふと云ふのは些と御無理で御座る、例年議會期に惹起す政權爭奪を目的としての空騒では、餘り賞めた嘶でもない、憲政擁護の神さん達に、少々考へて貰はんと、後世の歴史家は何の遠慮も會釋もなく、大正政治史に於ける衆愚政治の發明者は、政薩國の領袖連なりと鍊案を下されんことを畏るゝて。

對支外交の成功

然らば政薩國が争はんとする對支外交は失敗であつたか、成功であつたかと思へると、政友會が西園寺侯を戴いたり權兵衛を昇いだり仕てをつた當時の内閣に、優に出来る仕事をば、得う遣らなかつたといふ御蔭で、大

隈内閣が對支懸案の總決算を遣つて除けたものであるから、何と云つても大隈内閣は成功で、政薩一派は、寧ろ之に感謝すべきも之を難する資格がない、國民黨とて之を非議し得る程ならば、山本收賄内閣の下に、もつと大きな口が開きさうなものであつたが、例の狂犬が蓄犬となつてをつた所を見れば、理窟に合はぬ減らず口に過ぎぬのぢや。

大隈内閣に毒吐くことを專業とした政薩國の名士連や、所謂天下の耳目の定連が、非難するのは當り前ぢや、彼等のもとより國家本位から出るのではなく政權本位から出るものであるから、恚様せ碌な口利く筈はない、天下の識者は何と謂ふのか、問題はこれである、彼等は擧つて大隈内閣賛成者である、今次の對支外交を非常の成功と稱へてをる、之を成功とするの理

由は那の邊に在るか云ふに、我が實力を支那内地に扶植すべき階段が茲に確立せられた譯であるからで、これから先の仕事は、國民が此の利權を活用して國民的大發展を遂ぐるだけの手腕能力ありや否やの問題に歸すると云ふに在るのである。

要求條件と所謂希望條件との差別

對支外交に對する非難の、先づ第一は加藤外相自ら北京に出馬しなかつたのが不忠實、第二は何故要求條件と希望條件との區別を立てた、第三に何が故に出兵を仕た、第四に膠州灣軍隊引揚前に交渉を行はなかつたのは何故乎、第五に膠州灣還附の聲明は不都合千萬と云ふのである、一寸尤もらしい小言で御座る、然し案外効力のない小言で御座る、日露戰爭後に小

村外相が北京に遣られて、袁世凱に愚弄せられ、滿洲問題を未決にして歸つた例を回想すると、一國の外務大臣が手土産なしに北京へ乗込とは無用の事ぢや、寧ろ周圍の事情に親しい日置公使をして、樽俎折衝の任に當らしむるが至當の外交手段であるのぢや、第二に要求希望の二様條件の區別を立てたのは、山本内閣時代に於ける南京事件當時よりの慣例で、外交上の餘地を存する妙用の存する所ぢや、外交談判は相手仕事で、相手なしの談判とてはないのぢや、其處で加藤外相の胸中に、絶對的に貫徹したい要求と、消極的に希望に保留し置くべきものと、條件上に二重の區別を豫め立て、掛つたと云ふことは、いざと云ふ最後の場合の駆引上、當然の措置である、過去の我邦の外交で、十の要求を十まで貫徹した例があつた

ら、其れこそ未曾有の珍聞で、政薩國の親分や、後藤仲小路連中の教を承りたいものぢや、第三の出兵の可否に至つては是れは素より問題にならな^い、實力ある外交とは何事を意味するの乎、往いて學んで來るが宜い、北滿や蒙古に於ける露西亞の外交は、何時でも出兵で決して居るではない乎近世の外交は實力に伴ふ外交でこそ成功して居れ、實力を離れて外交はありはせん、これ位の消息にも通せず、彼是れ言ふ政治家の多い國では、外交は未だ却々ぢや、第四に膠州軍隊引揚前に着手しなかつたと云ふ非難は經濟上の問題から、即ち國帑を二重に濫費したと云ふ點から來るらしい、素人の議論として一應の理由はある、然し當時の形勢に鑑みれば、列國の暗中飛躍の猛烈さと云ふたら、支那に對して一言半句も要求がましい申分は

出来ない、逆も左様な時機でなかつた、所が昨年の年末に於いて、歐洲大亂の經過が東亞の大勢に一變を來し、日本の外交に極めて有利の地歩を與へたので、始めて本年一月に入つて、談判開始となつた次第ぢや。

最後に膠州灣還附の非難、國民の血を流して取つた領土をヤミ／＼還すのは不都合ぢやと云ふのである、これは感情論で御座る、憲法發布時代に於いては、衆民を煽動して政府を轉覆せんとする野心家の爲には、持つて來いの口實でもあつたらうが、今日では左様は參らん、もはや感情では行かぬ、實際問題としての膠州灣還附は、如何なるものを還附するか、支那政府の獲る所は何乎と檢すると、青島の一角の汚穢を極めた支那人町と、領土主權と云ふ空名とだけである、唯其れだけの事である、其の外何一ツ

返すものはないのである、即ち日本は獨逸の官有財産を全部相續するのであるから、支那には其の虚聲の大なる割合に、獲る所の實物は殆んど零ぢや。

不當支出問題

航路補助や、米價調節や、蠶絲救済など云ふ事項に、政府が責任支出を爲たからとて、彼是違憲らしく非難する手合が、政薩國中に多いけれども此の如きは政治の實際に携らない人間の言ふ事ぢや、然もなければ例の後藤、仲小路等の野心家の誹謗である、政治は活きた物である、法規の許す範圍内に於いて、臨機應變、責任支出で政務を運轉して往くのが、國家の急を救ひ、國民の難を助ける政治ぢや、豫算不成立の爲に、彼も出来ぬ

此れも出来ぬで、手を拱いて位に居るのは、時局を濟ふ政治家の事でない。

有名無實の選挙干渉

去る程に政薩國の定連は、三月の總選挙を目して選挙干渉呼はりをして居るけれども、那麽云ふ形迹は爪の垢ほごもない、寧ろ唯茲に在來政友會の登用を蒙つて居る、到る所の判檢事が、松田前法相の亡靈に對し、御恩報謝の忠義振を發揮し、反對黨の當選者を蝨殺しに選挙違反に附した事はある、確かにある、同時に選挙取締を勵行すると喇叭を吹き廻した尾崎法相が、一向取締の監督をせず、其の配下の判檢事をして無茶苦茶に人權蹂躪の行動を肆にせしめた所は、確に尾崎法相の失體！。

政薩國の大々の失敗

儲又爰に政薩國の大々の失敗の滑稽は、例の元田一派は盛に膠州灣還附の反對を怒鳴つて居るが、同じ政友會中の薩派の首領、床次低能が、還附論に賛成して居る、其の裏面には無論山本權兵衛、松方後入齋、果ては薩摩財閥が控へて居る、彼等は南洋にさへ發展すれば、首尾好く海軍擴張が出来る、其れには却つて膠州灣還附を利とするにあつて、床次に還附論を遣らせる、其處で薩派の畜犬たる八百萬の神様が何處の外交演説にも床次君賛成とムつて居る、質問演説の撤回も其實之が爲であつた、同じ穴の猫が聞いて呆れる、好い面の皮の恥暴しちや哩、然れば去月二十三日、松本樓に於ける國民同盟會發起の、對支問責有志大會の出席者は、驚く勿れ唯つた百五十人、犬養床次孰れも出席は仕て居たが、鐵拳の雨霰を畏れて積

説出來ず、小く閉息して居たげな、又京都、大阪、神戸の同會に、名士孰れも缺席とあつて、例の哩々連が眞赤になつて獅子吼して居ただけで、根ツから詰らないと、群衆一同が非常に怒り出して、何等の反響もなかつたさうな、斯る始末で例の彈劾案は幽靈然と何處へか消失せさうな嘶、仕て見ると天下は泰平、大隈内閣萬々歳ちや、若し又心機一轉、群衆心理が猛烈になると、所謂衆愚政治家の名士連も、世間瞞着の彈劾案を出さなければ體面の維持が出来まいて、とは云ひながら彈劾案が首尾好く出れば御慰み。

(大正四年五月)

第十五章 大隈内閣の運命と内外の政局

政權爭奪熱中の帝國議會

臨時議會も愈先月十一日に閉院式を擧げたが、議長に選ばれた島田沼南（一）、副議長に選ばれた花井博士との議長振は、一向感心せなかつた、其れはさて置き、大隈内閣の政策は全部多數可決の裏書を贏ち得て、先づ一萬歳の鼻を着けたが、然し其の反窓に於ける政權爭奪の運動は、非常に猛烈なものであつた、政薩國の策士連は後藤蠻爵、仲小路の小僧等の陰謀團と連合して、貴衆兩院から各方面に亘つて、ヤレ質問、ヤレ彈劾、ヤレ輿論喚起演説、新聞記者の操縦と、手を換へ品を換へて大隈内閣に當つて見た

が、詮する所山を抜く力も折れて松の雪同様、過ぎ去つた跡は天下の物笑捲土重來の氣運の再興に少なからぬ崇をなして居る。

武士道を外れた政争

立憲制下の政争は、封建時代の御殿女中式の政争とは、全く趣を異にし、一向國民の耳目を欺きて、得手勝手の仕度三昧を爲る譯には行かぬ、もはや樂屋の陰謀と云ふ事ではなく、國民の面前に於ける公争であるから、國利民福と云ふことを先にして、自己の入閣と云ふ算段を後回しとせなければ追及かぬ、然るに例の原、後藤、仲小路の一派は、今以て舊式の政争手段で、内閣が乗り取れるものと思ふたのが、大なる料簡違ちや、今日の政争は君子の争、武士道の争である、苟も戦ふべき時機には、互に正面かのちや。

ら眞劍を以て戦ふべく、戦ふべからざる時には臥薪嘗膽、雪辱の機を他日に期し、忍耐自重する所があつて、始めて捲土重來の威重を積むに足るものちや。

機會を待つが政治家の秘策

今の大隈内閣とても我輩の理想には甚だ遠い、所謂國民の輿論を基礎とした政黨内閣としては、まだ、意に副はぬ節が多い、然れども我輩が幾分の好意を大隈内閣に表せる理由は外ではない、これは西園寺侯の無能内閣や、山本伯の收賄内閣に比ぶれば、幾分か信用が出来る、對支外交問題に就いても、歴代内閣の懸案を、一舉に解決した手腕功勞は買ふて遣らねばならぬ、然れば暫く國民と共に忍んで内閣の前途を見たいと思ふて居る

然し、本來純粹の政黨内閣でないから、何時か其の内に龜裂が出来、内訌が起ると云ふ様な事で、漸く失政が重なつて、國民から飽かれる時期が必ず來るに極つて居る、其の時期は、内閣側から見たら四五年後の事の様に思ふて居ようが、問屋は決して然様長くは卸して置かぬ、其の折こそ政薩國の聯合軍が、正々堂々、一齊射撃を試みるべき時機である、内閣は此の時機に於いて仆すべく、天下は此の時機に於いて取るべきである、内閣の瓦解は當然の運命である、然るに政薩國の策士や、後藤男一派の策戦を見るとき、無用の時機に彈丸火藥を費して、彈効の巨砲を發つて、徒らに其の精力を竭盡し、反對黨たるの立場を自ら危くし、反つて大隈内閣の壽命を延長せしむるの結果を來して居る、一代の策士ともある、賢明なる陰謀團

の諸公の再考を促したいものである。

大隈内閣の壽命

さて然らば大隈内閣は是から何年續くかを見ると、政薩國の策士や、後藤男一派の定連が期待して居るよりは案外長く、大隈伯後援の哩々連が期待して居るよりは案外短い、然り實際案外短いものに思はれる、即ち歐洲の大亂の一段落を告ぐる時機が、大隈内閣の壽命を決する時機でないかと思はれる、其の理由は、從來日清の戦役でも、日露の戦役でも、外交談判に失敗を遂げた結果、時の内閣は孰れも國民の憤怒を買ふて仆れて居る、今度も加藤外相が畢生の智力を絞つて、列國會議に樽俎折衝を試みると仕た處で、落着く邊は大概極つて居る、列國の掣肘を那邊まで撃退し得るか

と云ふ問題である、然るに天下は一人の天下でない、外交談判は相手仕事で、萬事萬端、自分勝手に振舞ふ譯には行かないので、成行次第では又々國內に一騒動持上るであらう、内閣の鼎の間はるゝは其の日である。

龜裂を生んとする大隈内閣

大隈内閣の壽命が歐洲大亂後に決すべきは如上大體の觀測であるが、其の實樂屋に入つて見ると、既に龜裂線が各方面に現はれつゝある始末である、先づ手近の所から曰へば、八代海相の無能、尾崎法相の無能、一木文相の無能と、實に無能伴食だらけである、無能として引退すれば其れで可いが、無能と知りつゝ尙ほ嚙り附いて居れば、反對黨の外面攻撃を待たず内閣は内輪から瓦解すべき形勢を馴致しなければ已まない、即ち八代海相

が山内中將を免官したのは宜を得たりとして、財部中將を任用したのは如何なる理由か、少くとも茲に矛盾がある、一木文相が京大總長問題に失敗して、山川東大總長の兼任を請ひながら、今更山川總長の兼任を解いて、荒木帝大醫科學長を就任せしめたる如きは、是れぞ即ち京大側の互選説の勝利、文部直選説の失敗であつて、一木文相の失體の甚しきものと謂はなければならぬ、尾崎法相が選舉取締の勵行を名として、全国各地の判檢事をして、一種選舉干渉の實を行はしめ、人權蹂躪を敢てするを看過したるが如きは、法相無能の最も歴然たる證據である、世間の常識は案外に健全で、此等海法文三相の失體に對して、一齊噴飯を催して居る、流石寛大の大隈首相も、此の如き無能大臣を此儘据置譯にも行くまい。

大隈内閣の命脈延長の良策

此の如く樂屋を覗けば、内閣改造は目下の急要となつて居る、大隈伯は天下の偉人で、何と謂つても頽齡の事であるから、此の際著しき失敗のなきを機として、早稻田の草廬に引退せられ、政界の高等批評に其の晩節を全うせられたいと云ふ、大隈伯後援會の發起者等の首唱が、頗ぶる我輩の心を得て居る、然も今日得意の絶頂に在る樂天家の伯をして、今卒かに此の言に傾耳せしむるは困難であらうと思ふので、其處で先づ御大典を一段落として、伯自ら引退し、後事を加藤男に托し、思ふ存分政黨内閣の理想を實現せしめ、理想的善政を行はしめ、伯は之が後見役として、早稻田の草廬から注意的に高等批評を試みらるゝと云ふ事が、内閣の壽命を延ぶる

爲にも、伯の晩節に有終の美あらしむるにも、最善の道であると思ふ。

新政黨の組織の急務

斯様通觀して來ると、もはや大隈伯の仕事といふものは澤山ない、唯一事、我輩、否滿天下が伯の最後に期待囑望して居る一事は、伯百歳後の遺産として一大新政黨の組織である、即ち一面には政黨國を刺劇して一大政黨を作らしめ、己れ之に對して政府黨の同志會、中正會、無所屬を打ちて一團と化し、一大新政黨を組織して以て日本國民に遺すと云ふこと、別言すれば、伯が三十年來の主張に係る英國流の二大政黨主義の理想の實現と謂ふことである、伯の内閣引退前の仕事としては此の外にないと思ふ、伯たるもの鉢卷一番、如上新政黨の組織を決行して、天下の耳目を一新せら

れては如何。

元老會議の價值

最近の消息に據れば、政界隱居の身分たる元老等が、相變らず喙を容れるやうな趣で、甚だ不穩の風聞を傳へて居る、彼等が眞正に國事を憂ひて公平無私の立場から、國家の爲に大隈内閣に献策しよう云ふ精神だけは嘉すべきものではあるが、由來元老たるものは、政治上何等責任を負ふ者でないので、其の政治上の價値たるや貧弱のものである、彼等が次第に毫祿するのと、國民の政治的自覺の加はるのと相待つて、益貧弱の度を加ふるのである、然れば我輩の老婆心として、茲に一言して置きたいのは、元老諸公が國事を憂ふるの餘り、二三の策士煽動家に乘せられて、忽ち元老

會議を開催するなどは無用有害、これなからんを希望する、然もなければ元老會議は遂に利己的隱謀團に墮して、國家的性質を失ひ、元老征伐の鋒先を受けて、其晩節を危うくするの虞が御座る、元老諸公は何よりも自重自愛、明哲身を保つが爲に、國民の怨府や、非難の焦點とならぬ用心が、至極肝要の儀と存する。

日露同盟は天下の大勢

歐洲大亂の結果、世界の形勢は著しい變化を示し、我邦の如き、日獨戰爭に依つて支那に於ける獨逸人の破壞的要素を駆逐するに至つた、然し猶ほ我が國防上から見ても、外交上から見ても、實際懸念に禁へざるものは支那に對する露國の勢力の向背である、之を我が對支勢力と一致共同せし

めて以て、支那大陸の領土保全の責に當るに協力すると云ふ事は、世界の平和、人類の幸福に貢献する上に、極めて偉大なる功績と思はれる、然れば現下露國の官民が既に日露同盟の急務を自覺し、之を我に要望せるの切なるを好機とし、我亦之に應じて同盟協約を締結し、兩強相挈げて支那を扶植し、對支勢力の發展を期することは、我が大和民族の自衛上、將又發展上に、極めて必要の政策である、加藤外相は英國の意向を度つて未だ決しないと云ふが、英國も我邦以外、佛國に對し同盟同様の協約を結んで居るから、英國の意向に頓着せず日露同盟に猛進せんことを我輩は切に希望する、何に致せ、天下の大勢に隨ふものは興り、之に背く者は亡ぶる原則であるから、加藤外相も此の大勢に乗じて日露同盟に奏功して貰ひたい。

地方遊説と縣會議員總改選

政戦は今正に中央政界を去つて、地方政界に入つて來た、地方は今や各黨各派孰も活動の初期に入つて、至る所遊説多忙の兆候を示し、而して今年は格別其の兆候の激刺たるは、縣會議員の總選舉を控へて居るからである、然れば今秋愈投票期近づくに従つて、政府黨、反對黨各其の地盤の擁護兼開拓の必要上、衆議院議員の選舉戰と同一程度の激戦を演出すること、信せらる、然し地方政界も既に吳下の阿蒙でない、既に政治的自覺を啓いた今日、唯一片の情實主義や、瞞着手段では迎も通らぬ、必ずや自黨の政綱政策を標榜して、善政を天下に競ふの手段に出でなければ、勝利を期すること覺束なしぢや。(大正四年六月)

第十六章 元老と政薩國に包圍せられたる

大隈内閣

參政官の人物評

政務官たる參政官の設置は、大隈内閣の政策の一であつたが、臨時議會に於て其の經費豫算が、兎に角通過すると共に、愈これが人選の一段となると、人物本位でもなければ、黨内の功勞者に對する論功本位でもなかつた、全く猛烈なる運動と不合理なる情實とが纏繞して來て、下岡、濱口の參政官以外、果して適材適所の配置を得たか甚麼かは、國民も知らず、政黨も知らず、乃至正副參政官自身すらも知らぬと云ふ様な始末ぢや、當初

參政官を設置したる趣旨、然かも最も重要なる一個條として、確に記憶に存せるものは、未來の國務大臣たるべき訓練を政黨員に施すと云ふにあつたが、選任濟の今日から觀れば、豫想と實際とガラリと變つて、未來の大●臣●た●る●べ●き●器●は●一●人●だ●も●な●さ●さ●う●な●嘶●ぢ●や、大隈内閣が參政官の詮衡に一ケ月も熟考した上、此の通りに味噌を附けて、甚だしく國民を失望せしめたのは遺憾千萬。

中正會と菊池武徳

處が參政官詮衡問題の不平は、孰れの方面にもあるものと見えて、其の最もなるものが中正會の菊池武徳の脱黨暗示の宣言書發表である、成程菊池其人の人物としては、世間に定評はあるものゝ、尾崎愕堂を擔いて憲政

擁護閥族打破の運動を起し、これを神さんに祭り上げたり、山本内閣へ入閣落第とあつて、政友俱樂部を尾崎が組織した當時にも、無二の忠勤を挺んでたり、政友俱樂部分裂の悲境の場合、亦樂會と合同して尾崎の政治的命數を維持するに務めたり、海軍問題に活動して尾崎の復活を計つたりした處を見ると、菊池の尾崎に對する情誼と功勞とは、没すべからざるものであるが、イザ鎌倉となつて見ると、血も涙もない尾崎の仕向に、怒る事か、怒るまい事か、乃ち絶縁的態度に菊池が憤慨を漏すのも無理は無い哩

元老會議と大隈内閣

閑話休題、先々月以來、晴天の霹靂と政界を震驚せしめた元老會議も、雨ともならず、雷とも落ちず、案外穩かに一段落を告げて去る七月十二日

宮中の賜餐と共に、感情の融和が成つて、依然大隈内閣を援助するに、表面一決したらしい、然し表面は表面で、裏面の暗闘は今以て繼續して居る彼の賜餐當日に、松方井上の兩侯が參内を辭したのが、如何にも譎怪、畏き邊りの御信任を辱ふせる元老の進退としては非常の脱線的行爲である、怎樣やら薄氣味悪い癩の種が、未だ其處へらに残つて居て、將來の苦情が又々此の兩老の口から、出て來るものと豫期せられて居る。

松方侯對加藤男

井上松方兩侯の間に、他の關係はさて置いて、加藤外相排斥の一點が一致して居る、是れは何か政治上の意見が違ふ、其が爲の反對かと云ふと、然様ではなく、唯一片の感情問題で、世間の手前に憚りあつて、堂々と争

ひ得る種類の反對説ではない、即ち松方侯の加藤男排斥の動機は、畢竟するに大隈内閣破壊策の一段で、將を射は先づ馬を射よの兵法ぢや、然らば斯く迄思ひ切つた提議を持ち出さず迄に、例の後入齋の御前に外交上の入智慧をする黒幕がなくては叶はぬ、其の黒幕を誰かと云ふに、同じ薩人の若手で前の支那公使伊集院彦吉であつた、同じく參謀たるものが、例の侯爵倅川崎造船所長同苗幸次郎である、曩日大隈内相が對支外交の經過報告に松方邸に參向した際も、此の松方侯父子が列席の上聴取したげな、現内閣の女房役たる流石の大隈内相も、御用商人列座の前で叩頭百拜とは、莫迦に器量を下げたもの。

薩派勢力復活の殘臆

松方侯が何故左様一人騒ぐかと云ふと、財閥的より云へば三菱對薩摩財閥の對抗、政治的より云へば薩派勢力復活策の爲とある、山本權兵衛内閣が海軍收賄問題の突發に會し、歴代内閣の未だ嘗て受けたことなき收賄内閣、乃至海賊内閣など云ふ、頗ぶる名譽ある惡名を世間から頂戴して引退つたのが、漸く復活を見んとせる薩派の勢力に、痛切の致命傷を與へたので、薩派郎黨の切齒扼腕、憤慨の念遣らん方なく、爾來彼等は何とかして此の醜辱を雪ぎ、今一回其の勢力の復活を見ずんば止まじと、さてこそ歴史附の相棒たる政國兩黨の策士等と牒し合はせて暗密裡に計畫した現内閣破壊の陰謀が、即ち元老會議實現の動機であつた、是は由來大隈内閣成立當初の砌から引續いた秘密運動であつたのである。

松方侯對加藤男の絶縁

松方侯の胸の中を割つて見れば、大隈内閣成立當時大反對を唱へた以來機會あらば、齎を附けて一刻も早く取つて代りたいと、執念く狙を着けて居たのが、偽らざる事實である、其れには内閣の一角から、加藤男を彈出して將基仆しと來させるに如くなしと、廟算を決した、其れかあらぬか加藤男と松方侯とは、事實上疾うから絶縁になつてをる、其の次第を仄聞するに、對支外交の機密をば、逸早く政友會と薩摩財閥に漏し居つた怪漢は誰あらう國家の元老とある松方侯其人であつたので、如何に宏量くわうりやうの加藤男も、國家の機密を無視せる如き元老には困ると天を仰いで浩歎したさうぢや、然れば此の一侯一男の絶縁沙汰は、一昔前の事と消息通は卷煙草を吹いて居る。

毫祿せる井上侯

井上侯は誰も知る大隈内閣出產當時の御産婆役ぢや、其の御産婆殿近來きつい健忘性に罹つて、大分毫祿して御座る、勿論松方後入齋の毫祿に比すれば、幾分か輕症ではあるが、餘り褒めた話でない、其處で親戚筋の都築男不平滿々の後藤蠻爵、仲小路廉、さては政友會の高橋ボンチ達磨等の躍鬼連が、内田山に日參して御輿を昇ぐ、俄仕入の智慧が出来る、大隈内閣に種々の註文を持ち込み、段々指圖釜しく出喋る、果てはズツと圖に乗つて、加藤を放り出せと來たものぢや、裏面に廻つて突つて見ると、侯の幫間役の望小太バリストルを、外務省の參政官に加藤男が採用しなかつ

たと云ふのが第一の動機、第二は三菱對三井の憤懣、第三は長閑系と政友系統の不平策士が、種々の怨言を持つて來るので、忽ち例の親分氣前の反を打つて、彼是と大隈伯に御爲ゴカシの註文と出て來る、此處が侯のオセツカイ性の遺憾なき發揮でかな御座らう、然れば深い根據とてはない、雲を攫むと一般の感情的なる點に於いては、松方侯と同じである、唯一分の異なる所は、松方侯は大隈内閣の瓦解を企圖せるに對して、井上侯は加藤男を引退せしめた、内閣の改造を希望して居ると云ふだけの相違である。

西園寺侯と政國兩黨

さて薩派の元老松方侯と同身一體の精神で、一刻も早く現内閣を斃したいと熱望せる政國の兩黨は、元老會議の眞最中、例の政友會筆頭の策士岡邦

の奔走で、突如西園寺侯の上京を見せたり、此の違勅の臣西園寺和尚を招待して政友會懇親會の開催を演じて見せたりで一寸變つた芝居を打ても見又國民黨の首領犬養木堂は西園寺和尚を訪ねて大隈の怨敵退治の御祈禱を頼んでも見たけれ共、那れも是れも物に成らず、西園寺和尚はサッサと法衣の袖を拂つて、目的の療養地たる伊香保山へと飛錫し去つた、跡は狐に摘まれて居た様な莫迦さ加減！、政權に飢に渴ける政友會も、隱密裡の内閣乗取はもはや出來ない物と諦め、さては愈大浦内相問題に突撃する外道なしと、茲に精力を集中した譯ぢや。

政友會と大浦内相

過去十年の間、多數を擁して横暴を逞ふし、國權國利を私して居た政友

會も、蓼食ふ蟲も好々とあつて、山本權兵衛内閣に女房役を務めた御蔭に海賊内閣の相棒てふ汚名を被て、政界の威信地に墜ち、過般の總選舉に一跌少數に落ちたので、内心深く遺憾とし、其復讐策として何處迄も大浦内相に選舉干渉、議員瀆職罪など云ふ、有らゆる罪名を着せて、一面自家の汚名を分ち、他面内閣の破滅を來さんと云ふ一舉兩得の手段を講じて居る。是れが所謂大浦内相問題ぢや、其の鎗玉に上がった大浦内相の身の上、大正四年は厄歲ぢや哩。

選舉干渉を事實的に行ひたる政友會

大浦内相の選舉干渉呼はりをする政友會其自身が選舉干渉を實行して居る、論より證據は、選舉違反者が同志會にのみ多くて、政友會に極めて少

いふ事實が是れぢや、此の依怙偏頗の事實の原由として内面の秘密を叩くに、昨冬議會解散を告ぐるや否や、政友會の幹部は檢事上りの前司法次官小山温なるものを、日本全國到る所の裁判所に急派し、今回の總選舉に現内閣の敗衄は無論である、其れに判檢事側で政府與黨を嚴重に所罰すれば政友會は萬々歳、同時に諸君の昇級は政友會が保證することやら云ふ途方もなき甘言を啗はしめて、所在の旗亭に判檢事の連中を集めて盛に御馳走政略を行ふたものぢやげな、其の結果多數の司法官は同盟的に政友會の走狗となつて、司直の公權を内閣與黨の檢舉に全力を盡してをると云ふのぢや。

尾崎法相と司法官の對抗

斯の如くにして現に行はれつゝある選舉檢察は、政友會と同族の判檢事の職權濫用の爲に、政府黨より意外に多數の犯罪者を出すに至つた、之を見たる尾崎法相は、聊か自己の常識に顧る所あつたらしく、選舉違犯者の檢舉を打切るべく内訓に及んだ、處が今度は例の裁判所構正法の改正の結果、故の松田法相に拔擢せられた平沼檢事總長を首め、全國の判檢事の信々連が、反噬的に、司法官の職は神聖で御座る、我々は至尊御依託の司直の權能を執るもので御座ると、眞赤な嘘を吐いて、同穴の政友會と、地下に寝てをる松田法相の白骨に忠義振を發揮しつゝあるので、迂蘭盆に出て來た同法相の精靈蜻蛉も、此の供養に満足し、喜んで十萬億土に立ち返るであらう。

大浦内相と平沼檢事總長

司法官の活動は次第に猛烈の度を加へて、議會に於ける内相彈劾が失敗に歸すると、今度は何とか罪案を羅織して、内相を法網に陥れんものと云ふ政薩國の陰謀となつて、政友會の陣笠たる前司法次官小山温の暗中飛躍となつて、松田法相の子分たる平沼檢事總長、鈴木司法次官の往復となつて、茲に一條の脈絡が相通じたものと見えて、大浦内相檢舉問題と云ふ政治犯が突發して、天下の問題となつた譯であるが、十目の視る所十指の指す所、平沼檢事總長は政薩國と親交ありとは、儼として動かすべからざる定評である、内務省側に於いては大浦内相には爪の垢程も嫌疑の雲を懸けて居らぬに、司法省側では一網打盡と腕に撚を掛けて居るのが妙ぢや。

瀆職罪と一萬圓問題

さて平沼對大浦の問題は、何處に其の根據があるかと捜るに、増師案賛成者を募る爲に、大浦内相が二萬圓の軍用金を散布したと云ふ口實と、脱黨組の選舉に一萬圓の軍用金を配與したといふ觸込である、さて其の事情を如何と曰へば、豫て滿鮮方面に請負業を經營してをる讚州丸龜の白川友一と云ふ代議士が、何か一廉大浦内相に忠義振を發揮して、利權の賞與に有り附きたいの魂膽から、苦心の結果、一萬圓の金策調ひ、これを脱黨組の大正俱樂部の哩々連に林龜の手を通じて選舉運動費に分配したと云ふのが一萬圓問題の真相、それから二萬圓問題といふのは、大浦内相が大隈伯に自己の忠勤振を發揮して、大隈内閣第一の功臣たる名譽を博せん爲に

窃かに例の内務側の慣用手段を弄して、何處かで二萬圓の軍用金を拵へて某々策士の手より林龜の手を通じて、これも板倉中、日向輝武を始め、十五六名の同類に分配したといふので、所謂瀆職問題が起つて、檢事の活動となつて遂に天下の疑獄を惹起した譯である、樺太事件の平岡長官問題は長官一人の犠牲で済し、今回の白川事件には多數の議員を檢舉して居る、檢事局も成程公平なもので御座る？

政友會と天理教問題

斯くの如く瀆職問題が、八釜敷なつて來ると、血で血を洗ふ様な工合に政友會と天理教との關係と云ふものが、又一方に摘發され來るのである、即ち前年政友會内閣時代に、天理教を一個の宗旨として公認すると云ふ際

に、三十萬圓の賄賂を取上げた上、軍用金として年々二三萬圓づゝ献納せしめつゝあると云ふ事實を申立るものがあつて、驚く勿れ既に検事局の檢舉を見てをる騒ぢや、是の如き醜怪は勿論政友會中の札附連が行つた、一種の營業であつたらうが、其の裏面の真相を聞き正せば、苦々しい事實が山積して居る、一方に大浦の瀆職問題が起れば、又一方には政友會の腐敗問題が起ること斯の通り、藪を突いて蛇を出したと云ふ譯合ぢや、知らず平沼検事總長の司直の劍は、如何にか閃く、天下と俱に刮目して見たい物ぢや。

政界の現状

上來看來る如く、大隈内閣對元老の蠢動は、其の動機を分析の結果、三

井派を代表する井上侯と薩摩財閥を代表せる松方侯の聯合軍に對する三菱系たる加藤男の對抗戰と云ふもので、同時に又薩派と政友會と國民黨との聯合軍の大隈内閣に對する肉薄戰といふも不可なきものである、而して其の有力なる手段として、平沼検事總長が専ら政薩國の親友となつて、大浦内相に肉薄して穴を捜しつゝあると云ふ噂が、即ち現下の政狀である、此の結果が怎樣なるかい、日々に期待せらるゝ明日の觀物である。

大隈内閣の總辭職

前段に述べた通り政變の時期如何が問題であつた處が月末に至つて大浦問題は急轉直下し、愈々司法問題を惹起するの形勢となり、到頭大浦内相の辭職となり、延いて大隈内閣は、己れ政界革新を標榜したる脚下より、

之に反したる閣僚を出したとあつて、責を引ての總辭職と云ふ立憲的勇舉に出たのは全く政薩國の陰謀團に功名與へた譯である、是から先は大隈内閣の居据り乎、但しは一部改造乎、若くは舉國一致内閣の實現乎。

(大正四年七月)

第十七章 大隈内閣總辭職と内閣改造の裏面

政薩國の毒殺計畫

元老と政薩國の包圍中に在つた大隈内閣は七月下旬に至つて、政薩國の陰謀團に致命傷を受けた結果、大正第三次の政變を惹起して、三十日に至つて閣員總辭職の議を決し、一同辭表を闕下に捧呈した、さて其の茲に至つた真相を尋ぬるに、政薩國の聯合軍は、大隈内閣毒殺の計畫として、第一策は大浦問題を拏げ來つて、検事局をして檢舉に活動せしむること、若しその活動にして効果を生ぜざる場合には第二策として、此の米價低落、民間不景氣の眞最中に、海軍擴張問題を突附けて大隈内閣に殺到し、根柢

から之を轉覆瓦解せしめなければ已まぬと云ふ、決心の臍を固めた結果であつた。

小山温の暗中飛躍

さて愈大隈内閣を第一策を以て毒殺するには、有力なる下手人が必要なるは當然であるが、茲に其の下手人たる者が居る、即ち愛知縣生れの前司法次官小山温なる、未だ代議士にも出られない位、郷關に勢望の乏しい院外者がその人であつて、彼が大隈内閣を仆した殊勳者と、敵にも味方にも謳はれてをる、此の小山温なるものは、故松田法相時代に裁判所構成法を改正して、司法省の官吏を大審院、控訴院に配置して、所謂現今の司法省閣にて全國の判檢事を統轄する制度の出來た折の機密計畫に參與した一人

で、今の平沼檢事總長、鈴木司法次官と同功一體のものであつて、例の白川事件が發展するに際し、林龜が政友會の松田源治に辯護を依頼したのが原となりて、其處に罪案羅織の材料を得たものが彼小山温であつた、彼はこの内相問題を刑事問題に取揚げて、大浦内相を毒殺の目的物にせんと、盛に暗中飛躍を試みたものである、平沼、鈴木、小山の三人が鳩首凝議、如何なる打合をなしたか、それは穿鑿するまでもない、其の結果、小山温は大隈内閣瓦解の殊勳者と云ふ事に、誰云ふとなく確定したのである。

大浦内相の辭職

大隈伯は此の陰謀が暗々裡に進行しつゝあつた事を知らんでもなかつたが、大浦子を呼んで數回事實の有無を問ふたけれども、大浦子は開んな事

は爪の垢程の根據もないと答へてをつた、其の内情は大浦子の操縦したる策士連は、一命に賭けて事實を口外致さぬと云ふ約束であつて、大浦子も其誓文を絶対無條件で安信して居つたのが、抑も事の間違の初で、尾崎法相がこれを大隈伯に提唱した時分は既に檢察官の手に於いて、適法の手順が遺漏なく出来て居て最早如何ともすべからざる後であつた、之れが事實の真相で、要するに尾崎法相が大隈伯に好意的の警告を與へたと云ふのは陰謀の手筈が全く出来上つた後であつたとは、特に注意すべき事柄である其處で檢舉の火の手は益猛烈になつて、林龜の收監以來、もはや一刻の猶豫もならなくなつたので、二十九日に至つて俄に大浦子の辭表奉呈となつたのである。

大隈内閣總辭職

大隈内閣は大浦内相の辭職を早速奏請して大隈總理の内相兼任となつたが、伯は此の際何歟考ふる所あつたものか、閣臣中より自己の表榜せる政策に反したものを出したと云ふので、引責總辭職の英斷に出た、勿論この總辭職の英斷に出づる迄に、大分内閣はゴタついた様である、問題は、大浦子引責に對して閣臣一同が連帶責任を負ふもの歟、若しくは大浦内相自身の引退に依つて梟を附ける歟と云ふので、再三閣議を開いたが、閣議では留任と引責との二派に分れた、留任説を真先に提唱したるものが尾崎法相で、其の前日迄閣僚であつた大浦内相に悪罵を加へて、今回の事は全く大浦の自業自得で、他の閣臣の聯帶引責すべきものでないと云ふのであつた

これと反對に加藤男は大浦内相の行爲は成程閣臣共同の決議に本づきたるものでなく、全く内相一個の政治道德の責任問題に外ならざるも、事は既に公然の秘密となつた以上は、其の結果に對して閣臣の連帶責任を取るより外處すべき道がないといふのであつて、兩者の激論の末、同志會出身の若槻、武富、河野三大臣は孰れも加藤説に左袒した、留任希望者は尾崎と一木の二大臣であつた、八代海相は縱令留職するも海軍擴張の不可能なるを見越して、加藤男の引退説に、これまた別種の御都合主義の立場から辭職に決心したので、留任と引退との中間に在つて形勢を觀望してをつたものは岡陸相であつた。

司法官の手に依つて轉覆された大隈内閣

憲法發布以來、今に於いて二十七年、歴代の内閣中、議員を操縦せざる閣臣は絶無と謂ふも不可なき位のものであつた、乃ち其の最も顯著なるものを擧ぐれば、薩派の頭目松方侯は曾て二百萬圓の軍用金を振廻した其人で、これが發明人はと云へば、長閑の元老山縣公は其人であつた、爾來伊藤公や桂公にした處が、權兵衛伯にした處が、乃至原前内相にした處が、此の慣用手段を弄して來たことは、公然の秘密と認められて居る、原内相の郡制案提出の當時、多數の議員を懷柔したり、或は山本内閣の當時、議員を最も巧妙に一種の魔力を用ひて操縦したるが如きは、原敬御自身は疾くの昔に忘れて御座るかも知れんけれ共、事は公然の秘密で、世間は今猶鮮かに記憶して居る、而かも在來司法官の檢擧の厄に遭つたものが一人も

なかつたのは妙ぢや、當年の司法官は皆午睡の夢を貪つて居たものと見ゆる、今や大正も四年となつて、形勢劃然一變し、遂に這般の嫌疑の爲に、閣臣の一人までも、檢舉の鉤距に鉤けらるゝに至つたのは、破天荒の事件として、國民の耳目を聳動せしめたものである、過去の内閣は或は議院の彈劾に仆れ、或は民心の離反に仆れ、或は自家標榜の政策遂行不可能の結果に仆れたものはあつたが、司法官の檢舉に仆れた内閣は、大隈内閣が權輿である、御史の斷案に大臣免黜と云ふ支那式の筆法歟、若し此の檢舉が片手打の形迹なく、公平無私の司直的精神から出たものならば、極めて慶すべきであるが、皮一枚を剥いだ裏面に向へば、鼻摘みの沙汰だから困る。

總辭職と元老の居据勸誘

大隈内閣は立憲的に辭職した以上は、更に適任なる後繼者を奏請すべきが立憲の本義を全うする所以であるけれども、反對黨たる政友會は微弱であつて、國民の信望は既に地を拂つて居る、加之元老と言ふ厄介者が存在し、彼是國務に容喙する以上は、却々後繼者の奏請どころでない、唯投出しの外に手なしであつて、山本内閣瓦解の當時と一般、棄鉢的辭職を爲したに過ぎなかつた、そこで興津保養の井上侯以外の三元老が、三十一日以来各別に宮中に參内して、意見を奏上すると云ふ仕末で、正式に元老の會議を開いたは二日の日であつた、當日の意見を聞くに山縣公は現狀維持派で松方侯は何等かの別種の異圖も有たらしかつたけれども、先づ山縣公の意見に同意することに爲つて、此迄の體度にも似ず山縣、大山の二公が自動

車を驅つて午後首相官邸に大隈伯を訪問して、其の留職を勧誘して其の辭色頗ぶる懇切丁寧を極めたものであつた、何分 畏き邊の思召の程を仄かしたもものらしい、其處で大隈伯も之に對して、強いて頑張る譯にも行かず熟考の上何分の返答を爲すべきことを答へた、大山公は大隈伯に向つて内閣全體の意見はさて置き、貴下御一人の御心持は如何で御座る、それも承る譯に行かぬかと突込んだ處が、大隈伯はやつこのことに御茶を濁して閣議を開きし上御返事申上ぐると答へて別れた。

八月四日の閣議

八月四日開催の閣議に、大隈伯は閣員一同に向ひ、畏き邊りの思召のある所を仄かして、山縣、大山二老の切なる留任勸告を報告すると、加藤男

は相變らず引退論を主張し、激論五時間に亘つて結局歸着する處がなかつた、留任説引退説いづれも總辭職當時の顔觸同前にて、何等の出入もなく何等の發展を視ずに、其儘立分れた譯である、其れにも拘はらず大隈伯は現状を維持して時局を收拾するものは、大隈伯の外其人なしと臆がれて、茲に大隈伯自身の英國式の立憲の大義は一寸思案とあつて、日本式の君臣の大義に鑑みて加藤男の再考を勧誘し、若し男が斯くても最後の留職を肯んせざるに於ては、自己獨力で新大隈内閣を組織すると云ふことに、心機一轉したのである。

隈伯の内閣組織運動

超へて五日に大隈伯は、山縣大山二老に對し、自己の決心の在る處を告

ぐるど同時に、一面には加藤男に今一回更に最後の留職を懇請した
けれ共、加藤男の決心は愈堅く、反つて立憲の大義より説き起し、次に大
浦内相引退に係る人情問題に立入り、憲政道徳上、一時を糊塗して一身の
榮達を遂ぐるは、後世の笑を如何せんと、例の加藤男式の本調子を以て
頑として聽入れないのみならず、大隈伯にも、此の場合引退の適當なるを
説いて逆襲に及んだ、大隈伯も茲に至て全く加藤男を斷念し、他の若槻、
武富、河野三大臣に意を轉じて、各個別々に留任勸告を試みたるが、若槻
は飽まで加藤男の引退説に同意して、是亦隈伯の切なる勸誘を辭退した、
結局問題は將來ある政治家と、將來なき政治家との二手に別れたと云ふの
が妥當であらう、即ち加藤男と若槻は政治道徳を重ずる上からと、及び

個人的に大浦子に對する友情的の上からして、不合理なる便宜論に其の出
處進退を委ねんか、自己の將來の政治的生命を窮地に陥るゝの危険を慮り
て引退と決心したが、大隈伯、武富、河野の三老は、取も直さず過去現在の
人であつて、最早將來の人でないから、一時の便宜説に身を委ねても、老
人の花を咲かす方が、まづ／＼現代的ちやと云ふことに歸着したらしい。
然るに同志會外の大いなる尾崎法相、一木文相は當初より熱心なる留任
派であつた、前者は司法の神様で在つて、後者は官僚派の一人である、先
づ理屈は抜にして、御大典大事として、大隈伯の新内閣組織運動に参加す
ることになつたのである、扱て愈々新内閣組織の一段と爲つて、加藤男に
して引退する以上は、元老は大いに勢援を添へて、内閣組織上の便宜を與

へて呉れるかと云ふと、豈圖らんや全く嚴正中立で、茲に大隈伯は孤立せざるを得ざる立場に到つて、外相藏相内相とも何等天下の耳目を一新せしむる目的の選叙なしに、遺線的に新内閣を組織することゝ爲つたのである。

加藤中將の入閣と海軍擴張問題

八代中將が留任を拒んだのは、全く以て餘の儀でない、豫て薩派海軍に海軍擴張の安請合をして置いたものが、此の不景氣と減租の聲の地方農民より起らんとするに狼狽して、結局海軍擴張は不可能に終る者と見越しての辭職であつて、加藤中將が其の後釜に這入る以上は必ずや此の點に就て何等かの保證を得たものと見える、然もなければ用意周到の中將が、此の際海相を承諾することはない筈ぢや、其の實際を聞くと加藤中將は海軍擴

張と云ふ事に就いて、内閣が將來好意を以て見て呉れるかと尋ると、大隈伯は之に對して例の伯一流の當意即妙の返事をしたのであつて、結果に於いて無條件の入閣と云ふ事になつてをる、併し加藤中將は海軍隨一の豫算通であるから、如何なる形式に遺線を爲して、擴張計畫を立て、來るか、今後の觀物である。

結局一部改造の内閣

斯の如くにして大隈伯の個人的勢力で出來た内閣は、武富の藏相、一木の内相轉任、箕浦と高田の新入閣、(文相は久保田讓に交渉不調の結果)海軍大臣の更迭とで、其餘はいづれも留職となり、結局所謂一部改造にて八月十日新大隈内閣は成立を告げたが、同志會内閣の時代では、加藤男が

中心で、大浦子若槻が兩翼から補佐役と爲つて、大隈伯は其の上に國民の人氣男として立つて居たのであるが、今度の新内閣に於いては、内閣の中心が何れにあるやを疑はざるを得ないのである、西園寺侯の内閣時代に内閣不統一の非難が多かつた爲に時の議會に於て議員の一人が、内閣の中心は何れにありやと質問したるに、西園寺侯は、内閣の中心は内閣にありと答へたそうだが、此度の内閣の中心も甚だ國民には不明瞭である、若し大隈内閣の中心は何れにありやと問ふものあらん乎、恐らく西園寺侯の口吻を學ぶのであらう、伯にして若し此説を古臭しとあらば、大隈内閣の中心は大隈にありとでも云ひそうぢや、兎も角陸海兩相を除いた以外、大隈伯の改進黨創立以來の御家來筋で、河野農相と一木内相とは新參である、然

れば有體に謂つて、新大隈内閣は大隈伯の個人的勢力に依る平民内閣、即ち無爵内閣であつて、同志會が内閣の土臺でなく、大隈伯後援會が其の土臺であると説明するのが正に至當の見であらう。

片岡の入閣運動失敗

内閣居据の事が決まると、平生の大臣病を急に起した片岡直温、御殿女中の藤澤町田の參政官の招電に依りて上京し、ワツチが黨中第一の功勞者で御座る、豫算通で御座るとあつて、加藤總理邸を訪問して、例の毒々しい口調で、大藏大臣は己れの外に居らぬ、武富なんかは成つちよらぬ哩と云ふて自薦運動を試ると共に、更に大隈邸へ自動車を驅つて同様の運動に出掛けると、大隈伯は馬の耳に念佛で、片岡の申込を一向採用しさうな素振

を見せず、返つて内々武富と箕浦を呼寄せて、改進黨以來の關係から説立て、さて武富に向つて、御前は何とあつても己れに殉するが可い、若槻が去る以上は御前が大藏大臣を遣るが可いと盼付けて、更に口を箕浦に轉じて、昨年の内閣組織の折には、同郷の山本、元田が孰れも大臣に成つたのに、御前は成れなくて可愛想ぢやつたが、今度は御前を武富の跡釜に据へてやると云ふので、遞信大臣に成した譯である、其處で片岡は自動的運動したのが、マンマと落第して、同志會總務居据となつて仕舞ぢや。

後藤男の狂奔

這般の政變を豫期して居た者は、例の政薩國の策士連であつて、此外に最も好く大浦内相の檢舉問題を詳知して居たものが、是亦例の後藤蠻爵であつた、蠻爵は此の政變に乗じて、内閣組織に際し一種の割込運動を策せんとして、櫻田俱樂部を本陣として、仲小路廉、秋山定輔、坂本金彌を謀士として、第三黨組織計画を仄めかして、大隈内閣瓦解前から、頻りに暗中飛躍を試みたが、結局何等の得る處なくして、失望と落膽とで、それで仕舞ぢや、是れ畢竟彼後藤蠻爵が、政黨は一夜で出来ると云ふ様な簡單な料簡を抱いて、政黨の根柢が國民に在ると云ふことを悟らぬから起つた、自業自得の結果である、若し蠻爵にして政治運動を眞面目に繼續的に行はんとならば、結局同志會に復歸するか、或は政友會に入黨するか、但しは降つて國民黨へでも割り込むか、何れかの一を撰擇する外に、政治的生命を開拓する道はない、蠻爵たるもの、此の點に注意せずんば、再び同一

の失敗を將來に繰返して、現代の多數國民より獵官黨と嗤笑せられて終るであらう。

尾崎愕堂の醜體

後藤男が暗中飛躍を盛んに試みて居る眞最中、内閣員中之と一絲の氣脈を通じて居たものが尾崎法相である、愕堂は前大隈内閣に於て、瀆職問題の疑獄に、自己の無能を遺憾なく發揮したので、政薩國の哩々連より司直の神に祭上げられ、結果に於て大浦内相に對する政治的斷罪處分を行ふたのであるが、斯くて愕堂は一部責任論を稱へて、大浦子を逐ひ出した後釜に、内務大臣と据り込む方寸であつた處が、内閣總辭職と云ふ意外の珍事を我から惹起したもので、是では耐らんと、暗に右の後藤鬻爵と握手して

後繼内閣割込運動に腐心して居た事が、誰云ふとなく事實として世間に漏れた、然るに時局は逆轉して愈々留職確定と云ふ事に爲つたので、早速後藤と絶縁に及んだと云ふ話である、然れば政友會では、唾垂すべき尾崎法相と云ひ、同志會では尾崎は自己の無能を發揮して、巧く司法の神の化の皮を着て居ると嘲られ、中正會では參政官落選の菊地武徳が、尾崎を孤立無援の窮地に陥れんと狂奔して居る、不實者の政界の綱渡も危いものぢや。

大隈内閣改造の始末

如上記述し來つた如く、大隈内閣の瓦解は、政薩國の陰謀に起つて、小山温の暗中飛躍となり、檢事局の大活動となり、大浦内相の議員操縱の事件が、遂に司法問題を喚起して、最後の幕が、内相の政治的寂滅、大隈内閣

の總辭職と爲たのである、政變にあき果てた民心は大隈伯に尙ほ一縷の信望を繋いで居るので、結果に於いて伯の居据と爲つて、政薩國の陰謀的勢力は、何等贏ち得る處なしに、適々大隈伯に新生命の復活を與へたことに歸着した、若し政薩國に衷心から國家を憂ふる考あらん乎、自ら進んで天下の諸有政黨と妥協一致して、之に貴族院の一勢力を加へ、元老の勢力を後援として、舉國一致の内閣を組織するの案を立つるに於いては、民心立どころに翕然として向ふたであらう、然るに政薩國の策士の謀茲に出でず反つて一種の依怙偏私なる自己本位の内閣に松方後入齋を總理に戴んと試み、或は芳川顯正を首班に昇いで、同志會を除いたる舉國一致内閣論を唱へた爲に、元老の願みる所とならず、所謂舉國一致内閣論の首唱者たる彼

後藤男をして、再び失意の淵に陥らしむるに了り、大隈内閣を毒殺した其の目的は達せずして、却つて垂死の大隈内閣に再生復活の機會を與ふるに過ぎなかつたとは、諺に所謂骨折損の草臥儲と謂はなければならぬ、故に我輩は下の如く斷言せんとす、政權爭奪の目的と結果とが懸違つて、獨り阿呆を見たものが、即ち大隈内閣改造に對する政薩國の定連ちやと。

(大正四年八月十日)

第十八章 結 論

西園寺内閣と桂内閣

大正政界の表面の被膜を剝いで赤裸々の正體を検し、これに評論を加へん歟、略上來述ぶる通りであつて、唯僅々四箇年間に内閣を更ること四回に及び、平均一年一回といふ頻繁の割合になつて居る、而して此の更迭が孰れも憲政濟美の目的上に、有意味の手段であつたかと云ふに、結果から判断して敢て然りと謂ふを得ない、試にこれを看よ、西園寺内閣は自ら標榜したる制度整理を遂行し能はざりし爲、名を二箇師團問題に藉つて辭職し、これに代つた桂内閣は二箇師團問題を國防會議の結果に埃ち、最後の

解決を議會に懇へんとし、併せて大正の維新を意義あらしむるには、凋落せる元老と絶縁の上、二大政黨を確立し、己れ一黨の總理となつて立憲的活動の上に一新生面を開かんと試み、内に於ては軍閥を打破して軍事行政の一大整理を斷行し、外に對しては支那問題の解決を以て、外交政策の根本義として、着々實現の手順であつた、然るに薩派及び薩摩財閥を後援とせる政國兩黨の憲政擁護、閥族打破の運動の衝に當りて、脆くも崩壊すると共に、政友會總裁としての西園寺侯も亦達勅の臣として政治的自殺を遂ぐるの已むなき端目に嵌つた揚句、憲政擁護、閥族打破の旗印は薩閥擁護憲政破壊と轉化して、茲に政友會を基礎とした山本内閣の出現を見た。

山本伯の政薩聯合内閣

此の内閣は桂公の制度整理案を踏襲して、幾分か行政整理の實功を擧げ
たけれども、税制整理に至つては法令の改廢を行ふて、其の責任を後繼内
閣に轉嫁したるのみならず、尨大なる海軍擴張を斷行して、薩摩財閥に對
し、桂内閣破壊の恩賞を當行はんと試みたけれども、突如海軍收賄問題の
飛電、天外より來たるに會し、收賄内閣の惡名を得ると共に意外に脆く瓦
解して、永久政界の土底に葬られ、海軍擴張も何も出來ずに薩派の財閥を
して、空を仰いで絶望せしめた、加之ならず南京事件と謂ふ支那問題に就
いて、我が國民が大飛躍を試むべき絶好の機會があつたに拘らず、何等國
民の要求に應ずる効果を收むることが出來なくして、張勳の兵隊に捧銃で
失敬せられてそれで鳧ぢや。

大隈伯の同志會内閣

之に代つた大隈内閣は、同志會と中正會と貴族院の三角同盟を基礎とし
大隈伯を總理とした所謂同志會内閣であつた、此の内閣は海軍の收賄問題
を爬羅抉剔して國法の制裁を加へ、次に政界積年の宿弊たりし宮内省の廓
清を斷行し、さて愈自己の財政々策を實行して民力休養の公約を實現せん
とするに當つて、忽ちにして歐洲大亂、日獨戰爭の繼續勃發したるに遇ひ
既定の經綸を中止するの已むを得ざるの悲境に陥つた、唯此間に多年の懸
案たりし對支問題の大部分を解決して國民的の要求を貫徹し、猶又西園寺
内閣以來政界の暗礁たりし二箇師團問題を、議會解散と總選舉の結果に依
つて解決し、海軍擴張問題をも部分的に遂行し、更に大に黨弊を打破し、

政界を革新して以て大正の維新を意義あらしむる事に努力健闘して、幾分其の實功を挙げたのは國民の多とする所であつたが、偶部下の大浦内相が大に自己の忠勤振を發揮し、議會解散前に議員を操縦したる結果、司法問題を惹起し、遂に内相自身の切腹的辭職となり、延いて監督不行届の責を引いた大隈首相以下閣臣の立憲的總辭職の英斷を見るに至つた。

大隈伯の早稻田内閣

大浦内相問題の爲めに、政薩國の陰險なる手段に依て、大隈内閣は仆れたれ共、之を仆したる政薩國は、天下の輿望を收攬し能はざりし爲に、元老會議は却て大隈伯留任を勸告したるの結果、大隈伯は立憲の大義と君臣の大義との選擇に苦しみ、荏苒旬日を費したが、結局時局收拾の任に當り

得んもの、自己以外に其人なしと確信して、さて愈々政治的新生命を開かん爲に再び起ち、其の基礎を大隈伯後援會と自己の個人的勢力の上に置いて、舊改進黨の名士連を網羅して早稻田内閣を組織したのである、新内閣の使命は前内閣の政策の實行と、司法官の廓清問題即ち司法官をして黨派外に超然獨立して司直の職を盡さしむることである、唯果して這個新内閣が如上自己の政策を實行し得るだけの壽命を持続し得るや否、將來の事實が之に答ふるであらう。

内閣の短命

斯の如く、大正の維新は千變萬化、送迎に遑あらざるは正に走馬燈以上で、僅々たる四箇年間に四回の内閣更迭を見た、而して今上陛下御踐祚

以後のものに就いて謂へば、桂内閣は大正元年十二月二十一日組織せられて、翌二年の二月十一日に仆れた、壽命僅かに五十三日、次に山本内閣は同年二月十九日に成立して翌三年三月二十四日に仆れた、壽命一年一ヶ月日數三百九十九日、次に大隈内閣は昨年四月十六日に成立して翌四年七月三十日に瓦解した、壽命一年三ヶ月、日數四百七十一日、權花一朝の榮の歎は孰れも同じぢや、内閣の壽命の然かく短命なる所以は全く政争猛烈なるの致す所、孰れの黨派も政權獲得を惟れ狙つて、内閣の破壊に手段を撰ばざるに原由して居る、然れば自然の勢として主義政綱は措いて問はず國利民福、經世經國と云ふが如き、擧げて閉問題となし、一心一意無意味の政權争奪に熱狂して居るのが、各黨各派の策士謀士の爲體ぢや、其の結

果が或は衆民心理の煽動となり、排擠構陷の陰謀となり、毒殺謀殺の袖手傍觀となるのである、此の如くにして内閣短命の事實は、現代政治の劣悪なる状態を遺憾なく發揮してをる。

政黨の勢力

内閣の生命の短い所以は、前陳の事情であるが、さて今日内閣を組織するに當つて考量すべき、主要要素は何かと物色して見ると、やはり否定の出来ないのは政黨の勢力である、既に議院政治の端を啓いた以上、議會の行動が、單に國務を監督するに止まらず、更に進んで自ら政務實行の局に當らんとするに至るは、當然必至の趨勢である、随つて議院の内外に鬱勃磅礴せる政黨の元氣が、議院政治の元動力たるは已むを得ん次第である、

伊藤公を降伏せしめたのもこの勢力にして、桂公を降伏せしめたのもこの勢力である、遂に閥族元老を屈伏せしむべきものも亦此の勢力に外ならぬのである、政黨の勢力と閥族の勢力とは到底兩立することは出来ぬ。

然り而して實に現在及び將來の勢力は、加藤男の率ゆる同志會と、原敬の率ゆる政友會の勢力であつて、國民黨は犬養黨となつた爲に益々孤立し敬遠せられて、政界の圈内に其の存在を失はんとせる現状にある。

現時の政狀

前述の通り、政友會及び同志會の政黨的勢力が、政界の主要要素としては、其れ自體が猶ほ甚だ幼稚で、其の勢力又衆議院の一方にのみ強大で、貴族院に對して何等の威信を持つて居らぬ、然れば政友會も同志會も、單

に自己の力のみにては到底内閣を組織し得ざる状態に在るから、勢過去の舊勢力として、猶ほ其の惰力を現在に存せる、元老と云ふ偉大なる勢力の後援を得るか、或は好意の中立態度を保つて貰はなければ、内閣の維持が困難で、國務の遂行が一日も出来ないと云ふ奇觀を呈して居る。

この元老の勢力下に胚胎したものが、第一軍閥の勢力、第二官僚の勢力、第三に貴族の勢力、第四に財閥の勢力である、是等の諸勢力は何等國民の輿望を收めて居らぬけれども、貴族院に於ける勢力は全く此等の勢力下にある状態である、恁様云ふ政界の現状であるから、單に一黨一派の勢力に依つて政治を行ふと云ふことは到底出来ない相談であるから、彼の官僚黨や閥族も、或は元老の力を藉り、或は政黨の力を假り、其の惰力を維持し

て政局に當らんとして、一種の私黨朋黨を、政界の多方面に亘つて形くつてをる現状ぢや。

然し元老の勢力はもはや凋落しかけて、時間の問題となつて来た、長くも十年は出まいと思ふ、唯山縣系統の軍閥と官僚の勢力、井上侯の三井財閥と長閥とを結合した勢力、松方侯の大山公を參謀とした薩派財閥と軍閥の勢力と、大隈伯の所謂三菱財閥系統を後援としたる勢力と、政友會と同志會と國民黨との勢力が大牙錯雜して政界に割據してをる状態にある。

政黨内閣實現の困難なる理由

此の如く政黨の勢力が微弱で、四十年來の惰力を狭んだ舊勢力が、猶ほ政界に跋扈してをる以上は、何人も元老の勢力を假らざれば、内閣を組織

し能はざると共に、更に政黨の後援と貴族院の同情を得ざれば、如何に高遠の理想を以て内閣を組織した處が、實際問題に逢着して、一敗地に廻るは明白の事實である、然れば現時の政狀に在つては所謂一種の混合分子の結合に依つて公黨私黨の混合内閣を組織するに非ずんば、政府の維持困難なるの實況であるが、政策の實際問題となると、混合内閣は結局閣臣の暗闘、勢力の競争となつて、不統一の無政府状態を演出して、外部より破壊せられざるも、内部より土崩瓦解するの傾向があるから、怎樣しても如上の私黨朋黨の諸勢力を公黨化せしめて、私黨朋黨の痕迹を全く政界より剷絶するに非ざれば、政黨内閣の實現は困難であると謂はなければならぬ。

二大政黨對立と政黨内閣

前記の如く大正の維新は、短日月間に頻々政變を惹起して、徒らに意義なき内閣の更迭を見たが、唯一事否定すべからざることは、議會に於ける政黨の實力が漸次に現れて來た事實である、これは最近政治的現象中の最も顯著なるものである、即ち何れの内閣といへども政黨を無視して、超然獨立するが如きことは、もはや到底出來なくなつた、其れは確かに政黨の實力として認むべきものである、然しながら桂公が計畫した所の二大政黨對立の形勢を馴致して、一方の政黨内閣が議會に於て信任を失ひたる場合には、他の政黨の首領を後繼内閣の總理に推薦して勇退すると云ふ、公明正大なる模範的立憲的態度を取つて、議院政治の本能を遺憾なく發揮し政黨内閣の現實を理想化するといふ迄に進まないのは、甚だ以て遺憾である

る、これは全く政黨の力が時代の要求に應ずるだけの、國民の諸有社會を代表して國政を行ふの資格のない證據であるから、苟も國家を患ふるものは、政界を縦斷して、二大政黨對立の形勢を實現し、同時に私黨朋黨の積弊を打破して、之を公黨化するより外に急務はない、而して現實の問題に就いて曰へば、現在及び將來の勢力たる同志會と政友會とを改善して、諸有私黨朋黨を此の二大政黨の孰れかに降伏せしめ、同時に同志會と政友會とが、各黨内の積弊を刷新して、益其の公黨的性質を發揮し、國利民福を増進する爲に、其の經綸政策を表榜して、相對互角の勢を以て政界に對抗することが、政界革新の最も必要なる方法である、蓋し政黨の勢力にして各自に互角となるに於いては、新に政局に當る者が、前者よりもヨリ善政

を行ふ意味に於て、政局に立たねばならんことになつて、始めて茲に責任ある政黨内閣が出来、憲政濟美の目的を達する日が来るであらう、國民は其の日の成るべく速に來るべく、自ら發奮努力せなければならぬ。

陸海軍問題と御用商人の跋扈

斯の如く、新舊勢力を統一し、政界を縦斷し、二大政黨を確立して、責任内閣制を成就せんとしつゝある時に當つて、過去現在及び將來に亘つて最も國民の負擔を増加する問題は取も直さず陸海軍の擴張問題である、是れは帝國の權力を維持して、國民的生存を確實にし、更に之が發展を謀る上、最も緊急必要なるものであるが、動もするご此の問題が、私黨朋黨の軍閥政治家の擅恣的計畫となり、造艦、造兵、軍需品請負の御用商人の暗

中飛躍となりて、政界の各方面を腐敗せしめなければ已まぬ裏面的情勢を馴致するを免れぬ、例へば獨逸のクルツプ會社の如き、實に此の罪惡者の元兇であつて、我邦にても大正第一次政變の如きは、又同じく此の種の受負業者の暗中飛躍が、公然の秘密となつた實例である、此の如く歴代の内閣がいづれも軍閥の軍備擴張案の提出に破壊せらるゝ始末であつて、終始政界の暗礁たるものは、唯此の擅恣横暴なる陸海軍の擴張問題であるから、此陸海軍閥獨占の國防問題を奪つて、之を國民的國防計畫に決する爲に、我國民一般が、外交に對する常識と國防に關して必要なる智識を修養して、此の重大なる増税に關する問題を、軍閥政治家、或は御用商人の掌中より回復して、國民自己に之が料理解決に勉めなければならぬ、然ら